

サルケを切る作業は本家の兄弟（伯父と父）の男性2名が中心で、母親も切る作業を手伝っていた。ただし他家をみていると、男性ばかりでおこなう場合が多いようだった。切ったサルケを持ち上げる作業は、嫁（母）や小学3～4年生だったI氏自身も手伝った。サルケの採取をおこなっていた末期のころは、フォークを使ってサルケを上げた。当時は草履やわら靴を履き、ワラで作ったすね当てを付けて作業した。——「ちょっと待って。こういうもんだずごど教えるはんで。あてたないな。たってホガの人たげめ（前）にや。このヤヅ欲しいだって何すたきや展示会さ出すだって。五所川原のふと持ててまたいな。おう。やあ1年ばり前だけどもなあ。展示会さ出すてな。…ない。それくれでやった。ワもそういうごと好きだはんで。してさ、こういう、こういうこれだば今のカ（鎌）だってすけどな、これまとさ、もつともうわんつかふるぐ（広く）、こう長いわけさ。してこれだばこうえんた具合に、もうちよつと太いけどもね、してこれさこうも少しこう、こうなったなげえずあたわけさ。」「して、こう取るてへば、こうキズこう立てでこう、キズ付けてへばあの、こにあててあてたないなあ…。あれ、キズ付ける道具あ、あてたないな。してこう、このくれながくて、タヂ、タヂって。あてたないなあ。おう。してキズこつて、して、キズこ付けて、そしてこう、深ぐこう、こうやって、してキズこうまっすぐに付けて、して、今度こうビツと付けて、して、こうやってふたつつぐれえに（縦長のキズをつけて）、やって。うんうんしてここ（ヨコ）も今度だいたい、刃が、長さぐれえに、あの切る、こうキズ付けるの。してこう、こだどごで、これがこう長いどごでこうやるわけさ。こうやれば、こごまで来ればしよとこう、して、上のほうは、上の草は（土の層ごと）取るわけ。上の草。だいたい、20センチぐれえ。うん。うんそのあどだばワあ子ども、ワアやったでねえけどもな、親だちがやってあやづ、見たんたけども、まあ、まんず、まんず7メートルが8メートルぐれえだな。うう。（タテの切れ目を入れるのは）二つでも三つでもこうだいたい3つぐれえにやってあったな。あまりこう遠くが、歩がないようにして。して、こう、（横の切れ目は）5つばりこう取るわけさ。5つぐらい。（上の草は）これでこうひゅってこう（取る）。」「大きいやづ（大きな刃のついたクワ）でなしてさ、そういう柄、こう長いどごで、これがこう、もう少しこうひろっとナンボが柄がな角度こう曲がってあったな。な。こう、たまってあ、たまってらって言い方していいんだが、なげぐねがったな、キモチどしてナンボがたまってあったな。うう。（刃先は）それは、研ぐ。普通の。まっすぐまっすぐ。（普通のクワの）大きいやづな。（サルケ専用の）そうそうそう。（名前は）さあ忘れたよそろ、あれ、こごに。このめえまで、とにががあるにはあるだ。今急に言われたはんでわがねぐなった（笑）。して、深さ、まんずこのくれえだな。だいたい20センチぐれえだな。サルケがな。そうそうそう。1個だいたい、それもだいたい、（横の一边は）まあんず30センチぐれえだな。うん。うんだな。それくれえだな。こごは……いん、だいたいこご（縦の一边）も30ぐれえ、30ぐれえだな。うおう。（クワの幅は）まあまあ、まずおなしぐれえでねえがなあ。（クワの刃も同じくらいの幅があつて）そうそうそう。おっきいクワだもの。」「してさ、今あの、考えでみだつきや、あの、オラ稲垣に、ムガシのカヤ屋根あるわけ。稲垣村で今現在建であるわけ。そごさ、今行ってみて、サルケあるがもしらねんだ。火焚いであどごあるべ。（テンズキは）使わねえ。オラだちだば、こう曲がったりしてもマネし、やっばり、年行つたベテランの人でねえばやらへねだ。うんうんうん。（テンズキは使わずクワで持ち上げた）そうそうそう。」「（本家と）一緒にほら、兄どオジと一緒にお仕事して（サルケを掘った）。そのあだりだば、嫁なつてきて今の女の人みんなそう田んぼさ行つて手伝いたね。して、田んぼさ、田の草刈りささへでも、それこそ、親がこだ子どもヲ、エス置いで、エンツコつてわがてらが。エンツコ。あれさへでおいだものよ。で、あの、嫁が田にいるがど。（サルケも嫁が）手伝たなあ。お、オエでだば手伝た。ホガの人はそれほどで、手伝わねでオドゴの人でやったはんで。切る人だば専門にその人（本家の兄、自分の父のことを指す）いだはんで、だてこう、上さこう低くなるべえ、掘ったあど低くなるどごで、そのナガさ入って、その上さ、うん。上げだもの。して、こう落ちづでまれば、こう、重ねで干すような対応にして。（そういった作業を女性も）やっだどぎあつたな。ねえ人もあつたけどさ。（掘るのは）2段だな。2段おんたな。うう。してそのあどさ、別に、あの、その掘ったあどだのってそう2段も深いどごで、草も、おがえねし、カヤをおがえねであつたんだ。してだいたいだその場所決めてで、毎年そこの場所を決めてでとつとぐの。うん。（その場所を他の目的に使用することは）なくてあたたな。みんなほら、だいたいその辺だと思つてその場所をみな選んで、その場所だけ、こう、こんだげ広いもんだどごで、じぶだちも大体、三段、ぐらい、一人して三段ぐらいみつたなんだけな、その頃だばみんなあつたな。ううそれまでだば、ねんたな。うん。二段ぐれだな。二段ぐれだな。して、こう、切るにも、うん。こうやってもまねしこうやってでもまねしますぐに切るそれがら、こうなたりへあまねしこう、ほにやまねどごで、オアだちだばただ、3年生が4年生のあだりだたなみで、それでも見ででもいげねも使われだもんだ。なも、靴だてなもねもだもの。草履だとはワラだどがの靴ばりよ。それワたちだばあい（ああい風）にやえね作えねどごで、ウヂのオヤヂそえて作れねであつた。何でがてえば、そういうせいさ今のせいじだどが、して、なんちゆだがな、旦那衆系統てしだな、うん。アダメなぼがいしゃたどごで、そういう百姓のやづがあまり、なくてあたたな。うん。そのあだりだば（サルケ切るときには）、その、あれ、ワラでつくたあの、こう、ヤヅ、あるわけさ。脚絆みたずワラでつくたずあるの。それふたつ履いでやたな。そしてさ、それがらアダメいい人であつたがらしてこんどその今サンボンカてあのサボカでねぐ、サンボンつくてるあの、内にもあるけども、アレでヒロつこうあげだりしたわけだ。ホーク。ホーク。それ最後さなたきやおべでる人もあたはでそれでこうふとつふとつあげだりした。最後になつてがらな。（国民学校4年生ぐらいの）ときだな。あ。（フォークで）やったな。オカネある人だばな。ねひとだば、てたて履き物ねもの。（草刈る鎌のようなものはサルケ切りには）使ねであたな。」

乾燥・運搬・保管 サルケを採取した場所の近くに4～5段ほどの高さで、少し間隔をあけて互い違いに積み重ねた。乾燥させるための場所が広いことと、風で倒れないようにとの配慮から、高く積み上げることはしなかったのだという。乾燥には1ヶ月を要

しなかった。乾燥させたものを運搬するのは8～9月頃、遅い人では稲刈り後の10月だった。乾いたサルケ5枚ほどをワラで束ね、馬で自宅に運搬した。家の裏手に運び、タテヨコ、高さともに2mほどの山盛りにして積み上げ、カヤやワラでこしらえたヤネ（覆い）を被せて保管した。その一山がおおよそ1年分の量であった。家の前に置くのは体裁が悪いので、家の後ろにばかり置いた。——「そうしてすあ、その（サルケを）採ったあどが、して、その、水ジョブジョブってるどごで、干しためぎが、そごのそごの場所さ、場所さ重ねでこうやって。こう、やって。その上段々にたがぐこうやって、こう、風来てひっくりがえたりへあまねはんで、コヂどこう、こう（煉瓦積みのように互い違いに重ね、間を少しあけて）、こうやってれば、上さまだこう、重ねで。そういう具合にして。ちょことずづ（間隔が）空いで。して今度、ある程度、一ヶ月もくらさねえね。切るんだ。乾ぐ。乾燥するんだ。はずせばこども、古くなるし、おう。おう。これは、大体、4～5段だな。場所ふらい（広い）から、そう高くは積まねえの。うん。（切った場所）はおお、あ、今行ぐがしたら。田んぼ、田んぼになってまってるんだけどもな。」「運ぶどぎも、馬で運ぶ。束ねで。5つぐらいにこう。縄でこう、束ねで、縄って縄もねえどごで普通全部ある田んぼのワラで。ワラで手にむすて（結んで）やった、人もあるし、お金ある人だば縄で。（父親の生年は）明治何年だべ分がらねえで。あの死んだアレさだば書いてらばって（笑）。うづのチヂ親がなんつうだ馬の先生であったんだ。して本いっぱいあってさ。なんちゅうがあの、ヨゴブエ吹いだりさ。」「うんそのあだりだばウヂでだばエの、裏。裏さ、馬で持って来たやづ、して、あの馬さあの、何てだ、アレさ、何、忘れだであ、こうえんたず、こう、掛けでな。その余ったロープでこう、さついで、それ馬さ。持たさったわけさ。そしてそごさ来てがら、まだ、あの、サルケの、あの、盛りって、そのサルケでこう、こう、積んで、盛りにしたわけ。して最後さなつてあの屋根被せるに、して、その、なげカヤこで、屋根を作って、してカヤこで、カヤなもねえ人であれば、ワラ。この、あの、ワラしたてな。ムガシだ今だあワラ切つてしまふばってムガシだばみなこて手で切つて、ワラでこう屋根を作ったもんだんだ。うん。んだなあ。手届ぐだけだはんでまず1メートル50も、まず2メートル近くも、あつたな。2メートル近くもあつたな。うん。」「あの、はごでしまえば、イネガリだどが、イネガリしごしてまでがらでもこからはごんだりし、ばい（場合）もあるわけだ。」「（一年に採取する量は）ほーんじやなあ、そごまでわがねなあ。（サルケの盛りひとつが1年分ですか）そうそうそう。（大きさは）んだなあ。場所ねどごでほとんどみなうし、前だどごが格好悪いがら、うそ（後）さばりやったもんだ。（2m四方で）高さまず2メートル、ウツだばまずその位だべな。」「（乾燥させたものを家に運ぶのは）8月から9月頃だな。遅い人で10月だな。稲かてまでがらだどごで。」

用途 サルケは炊飯に使用した。サルケがないときには、ワラやカヤで焚いた。また、サルケの熾を利用して握り飯を焼いた。「私たち分家の者は何もないでしょう、だからカヤやサルケを燃やしたのです」とI氏は語る。——「して、ご飯、でも、サルケもはだばたて（炊飯に使用したけれども）、サルケねえどぎもあつたんだ。そのあだりだばワラ。ワラ焚いだもんだんだ。ワラで。そんとき小学校の…ときだな。して、ワラ焚いで。して、ワラで、にぎめし握って、ガッこさ持つてぐにぎめし、そのワラさや、ワラねしたくれやづねばてまでそれでもいいどもて、食べる、してえ、カヤ。あのなげカヤ、今見にぐ（これから案内する）カヤ。カヤだばあつたものせ。あたものてオラだちオジカマドのフトダヂなもねきや。カヤだば、燃やしてしき。そのあどカヤでいいほうであつたんだ。（それらの燃料とともに）サルケも、使つた、うん。サルケなもねえ人も、あるわけだ。うん。ある。」「（炊飯もサルケで）そうそうそう。夏もサルケで炊飯）んだんだ。炊いだ。（カギノハナ＋ナベで）んだんだ。何でもい。それさ、サルケでぎでがら今度、あの、それこそ、にぎ、おにぎり、それさ、焼いだもんだな。ああ。そうそうおうそうそう。あの、こお、燃えでまつた後な。そでねばいぶりが」

操作 サルケは座って膝の上で「クチャラ」とふたつに割った。割ったものを、手で4つ～6つに分けて、「とんどまどぎきたどえやって」すなわち、少し間隔をあけるように積み重ねて、前に燃やした残り（熾）を利用して火をつけた。サルケは火がつきにくいものだという。一から着火する場合には、サルケだけでは燃えにくいので、ワラシビを差し込んで火をつけた。ヒバの皮も利用したが、それはジャコツリ（魚釣り）の人たちがタバコを飲みながら火種としてヒバの皮を縋ったものを使用していたのをみて真似た。また、（名前を忘れたが）蠟のような青いものが塗ってある薄い桎板である。それが少しでもあれば、青い火が燃えて、マッチのかわりになった。晩にサルケが半分以上燃えた燃えさしものに灰をかぶせ、火種として保ち、翌朝祖母が起きてその火を大きくした。——「うーん、（サルケに）すぐ（火は）つがねえなあ。その前に、ほら、ナンボが燃やしたやづこう、ある、あるわけだでばな。して、それさこう、こう。してせあ、サルケでこう、座ってれば、シボトさこして、し、そごあシボドだどすればな、こう深くやって、こう、ダイドゴにナンボがたげどごで、こうやって、そちやこんどサルケを持って来て、して、こんだ割つてこう、へばクチャラつて。（膝の上で）こう。うんこう、膝で割つたな。して、割つたやづしてその、その後、こう手で、こうふたちに割つてしまえば、あど手でこう、手でこう。よつっ…むつづぐらいに分がれでやつたな。して、そして火たぐどぎでも、たんだこうやるでねぐ、ナンボがこう、あの、燃えやしどぎさよげえあんまりやらねで、してこうナンボがこう、い、い燃えやしその、それが出はるような、どごこうやって。とんどまどぎきたどえやって（間隔をあけるようにして）。やつたな。」「初め、火つけだとき、かならずサルケばりだあマネてワラこ、ワラのこう、とつたシビ。シビここう、さして。うん。で、してさ。あるどちやいげば、その、なんてしだ、その、ヒバの皮あるべ。そのヒバの皮でムガシの人タバゴのんでんだ。まずそしてしてジャコ（魚）釣つたりごえんたどごで、サガナつたりす人いるわけよ。そでなでこうニオイすだなどもてれば、縄こでその皮、柔らかくして、こしてなつて、そさ火こついで、へばイヂニヂいべこう、そちやおいで、タバゴさ火こついで。そうそう。それを、うづでもそれマネして、そごさ、あの、それ、やてぐだ砂こさ置げば、いいつて。してそれとも、あの、サルケ。サルケがなもねぐなれば晩でもねぐなれば、こだアサマに焚ぐひばだこね

ではな。ひばこやるには、その、サルケ、まだ半分以上燃えてまで、煙で、ではない程度で、そで、アグ被せるだもの。それを、アサマに起ぎで来て、ババ起ぎで来て、その（火種を保持した）。」「してさもうふとつさ、その、はしねえ、そのひばだこでばの。アレ、マツ（マツ）てなもねきゃ。であのあだり、うしーい（薄い）、マサて、あれだうしーい、なんていであ、イダこ、うしーいイダこだねしてこ、それさ蟻って青いこう、なんちゅうがわがねな、ぬってるんでねがなしてこだ、それとって、して、こうさぐ、わんつかでもあれば、それやれば青い火燃えてこう、マツツのかわりあったわけ。うん。いまこして話こすれば思い出すであ。なもマツねふて。」

副産物 煙がもうもうと上がった。その煙を利用して、ワラグツやツマゴ（藁靴の一種）などを木で組んだ四角いもの（火だな）に吊して燻した。家には扉はなく、出入り口はすべてワラで編んだムシロを掛けていたので通気性はよかったが、それでも煙が充満した。I氏によると、「こんにちば」と言ってムシロを上げて他家を訪問しても中は煙で見えず、「あれ、どこにいますか」という状態だった。「あのね、ウチでたった今サルケに火をつけたところなんですよ」「ああそうですか」「ぶつからないように気を付けて下さいね」といったような会話が交わされたものだという。

中学生のとき、金木の中学校に入学した。I氏の親が稲垣の中学校に通わせなかったのは、岩木川のこちら側は地吹雪がひどく、通学で苦勞するだろうという親心からだった。登校時に金木の生徒から「うわ、くさいニオイがするなあ」と言われた。「何がくさいって？」と聞き返すと、「サルケのニオイだよ！」と言われたという。体にサルケのニオイが染みついていたからだだった。そのニオイは「ドクドクしい」もので、土のニオイもいくらか混じったものだったという。対して、山地をかかえる金木では、日常的にスギやヒノキなどの枝や葉を焚いており、サルケは使っていなかったので、金木の人にとって、サルケのニオイは嗅ぎ馴れないニオイだったのである。逆に、I氏は金木の生徒たちのヒバやスギを燃やした木のニオイを嗅ぎ馴れないものとして感じたという。金木の人たちのニオイは、サルケのニオイ比べると「よい」ニオイだったという。ヒバを燃やすとパチパチと燃え、その燃え軽やかな燃え具合も、ニオイもよいものに感じた。そして、彼らの生活は自分たちよりもレベルが一段と「上」だと感じ、だから勉強もよくできるのだと思った。

サルケの灰は利用することはなく、水たまりに捨てた。——「（煙が）出る出る出る。で半分ぐれえこうやれば、煙もうーもうって。そして、その上さムガシの人って、なんちゅうが、アラ、ムガシ今だけにだきや靴だのってねはんで、ワラグツだどが、ツマゴだどが、それおべであべ。それを、干すために、その上さこう、木っこでこう、まんががさこう、そごシカグにしてあげどぐようにして上さこう、ワラでこう吊して、こう干すように、やった。うんうん。いぶるいぶる。ちょっとソバにいでもわがね。でして、してや、うにややや、戸開けであ開けでも、なも、それこそ煙、風はてくれれば、つがる部屋さ、部屋て部屋てなも、みなそれこそ戸て戸ねんだ。ワラで編んだムシロ。で。して入り、ゲンガンのどごでもみなムシロだ。ムシロ。して、『ババやどひゃらば』ってこう開けで、エのナガさ入ったのや。『おう、どひゃばってどごにいだば。』『うんオエやたった今ふい（火）つけだもなサルケさな』ってこう。こうすんだ。『ああんだなんだな』って。『ぶつかれあまねやろう』なんてな」「見えねなあ。そして今度、ま、ちょっとじっと長くなったけど、ワ中学校のどぎ、金木の中学校さ入ったわけさ。イナガギの中学校さはいねだおえで。親だちが苦勞して子どもだちがかわいそうだもってこちや行けば風強ふて冬のあだりだば大変であつたふぶ、吹雪で。して金木のほうまっすぐに行くとぎ、アサマだたきやばだだきや。な。して金木の学校さ行って。して今度、向がいの橋わだれば、みな向ごうの人だちみな、木の、葉っぱを焚いだもんだ。あの、シギだどが、ヒバだどが、そういうずみな焚いだものよ。そして学校さ行ってその人、向ごうの人だちどいしょになるであ。朝あのあだり。『オヤンズァ』って。オヤズでカチャが、カチャだてすぎや。『カチャだや』って。『ナンボくせえカマリひばな』『のあークセえカマリよ？』って『サルケのニオイしてや！』。…ほであつたなあ！そして、その人だち見ればニオイしてらどもえばやっぱりヒバだどが、そういうスギの、枝こうやったや、やづ。そういう、ニオイしてあつたなあ。おう全然違る。体さ染みこんでまっしてこう。うん。『んばニオイすばな！』てし（笑）サルケのしてまで染みこんでまってるんだもの。」「うん。（そのニオイは）どったああ、どったあニオイてへば、う、ドグ…ドグドグしてしえばいが、やばり、こう、ツヂのニオイもなばが混じやってる、なあ。ツヂ、なもねえばってなあ。てグジャグジャずもんだはんで。うん。（金木の人たちのニオイは）やっぱりいいな。ヒンバあだりどばパチパチパチパチって、ヒバの、葉っぱ。パチパチパチってこう燃やせあパチパチパチすんだ。いああそのニオイまだこう、いいい。おう。いぐ感じだ。しもどしても、おああイヂダンとこう、うえにこう、ど思ったな。ん。したんでみなアダメいいだど思った（笑）。うん。こなけたなあ。して、やっぱり向ごうさ行けば、やっぱりカヤ。うん。カヤ見にぐ？そごまで。（小さな赤い祠は）何の神様だが個人の神様だな。ムガシから。何十年なるべおほだば分がねなあ。オラダぢまえでのいわがでまた、あつたもの。ここに。」「アグ（灰）、ただ低いごちや家のすまこさでも、水溜まってるどごさ、えの、そさ捨ててで。」

その他

(1) カヤ

サルケを利用する時代が過ぎて、圃場整備が始まった。泥炭地なので機械を入れることが難しく、岩木川からポンプで砂を送り、撒いた。圃場整備の際、用排水路を機械で掘った。用排水路の脇の道が不釣り合いなほど広いが、これは大きな機械を入れるために広くした名残である。このあたりは土が厚く、カヤが生い茂っていた。カヤ刈りには柄の長い大きなカマを用いた。カヤを掴んで下から手前に引くようにして刈り取ったものの2回分を、ワラで結んで1つに束ねた。向こうに見える堤防の向こう側の岩木川沿いに、カヤが下車力のほうまで広がっていた。戦後の思い出話だが、一面に広がるカヤ野原を走って、飛行機

が墜落した現場を見に行っていたことがあった。機体は解体され、馬で運ばれて行った。——「この辺はあの、この、カヤ。おがってあたなああ。こういうやづな。そのかり、ツヂが厚いがら。うん。でえ根もつがる。うん。うんほとんど、たてしかど分がねだけでもだいたいほだな。これもこれもあづも(カヤ)。これが残したということは、ここに排水あるべ、このサギももっと倍もふろいんだけど、それ、この圃場整備したどぎ、大きいレッカーであるべ、あえさバケツこう付けで、掘ったものよムガシは。したどごで道路もふろぐねばなねもの。こつにいで掘ったやづ、こちに上げで。したどごでどろ一とふらぐねば、置き場所が狭いば、困るけあ。今ごそこういうみな機械でやって、いらねえ今さでいえば、『何こうふれえだば』って。そうもるけ(思うじゃないですか)。て、このひ(辺り)も、もどのごもこうふらぐなくてもいきや。て今度向こうさ行けば、ホントの専用の道路だわけよ。こつにこうあるべ、狭いのよ。こづこれだけ大きくて機械でレッカーで。機械おっつきいながらこごもふろぐなるだ。たどごでみんなあ、あの、そのブラグの人、田んぼの人たじあわんつかずつでも、採られだもんだでば。どんだばそれごそムガシの、今でもある、屋根、カヤ屋根であるべ。アレ、あれがさまだまだみなおがるけども、まだまだおがるだ。こたもでね。してこれさまだ花こ咲ぐんだ。うん。刈った刈った刈った刈った。カヤの刈りがだ、こたおきいカマあるだ。」「はせ、今でもウヂにあるばてホセやづ。ふれやづでなく細い、やづこう、こしてなぼが長めい(柄)がなぼが太いやづ。して、こう、こう掴んで、こう、なげきや、こう掴めで、下がらこう、こう。おお。下がら。(手前に引くように)そうそうそう。こうやった下がら。こてな。おう。て、だいたいこのくれに、なつて一回こう、こうやって下さおいで、して二回ぐれに、採って来て、ワラで、ワラがこれさこう、(腰に)むしんで、してワラで適当にやった、採って来てワラでこえてやったんだ。してすあ、してこの、ほん、このカヤやるてへばさ、そごにテンボウ(堤防)あるべ。テボウあて、あづのほう、(あづの)ほじにガバーとあの、いわ(木川)、川のフヂに、こういうカヤが、グホーッと下シャリギのほうまであったわけ。今でもあるけどもの。そうそうそう。あるわけ。その辺がらこちや、ほとんどほんだった」「そして今度サルケ掘ったあど、こた圃場整備なったわけ稲垣で。で、その、サルケだどごでドブラどす機械も機械もはらいだべ機械ばりでねけども、して、岩木川から、そっから、ま、ソゴのでも、そっから、ポンプで、あつがらポンプで、ふりかけだもの。こごさ。砂だなほとんとな。それどぎ、足りなくて、こた、ダンプで、こただいたいこたみなだいたいとれなくなつたけども、こた、こたなんちゅべダンプだのあつてきたけあ、して、とる場所も、今度、下やわらかいどごで、そさこの、カネの板あたんだ。して両脇さあのダンプ入るようにして、こう、とったもの。そのあたり、営林署で掘ったどごで、営林署の人だちイヂニヂに一回見にきたもんだ。で場所が決まって。でどっから採ればいいがどもって、してやったもんだ。そのあたりだばワ、機械乗ったりしてユンボ乗ったりしてやったはんでな。まんずそういうことだな。」「ワ小学校のときだべおんそれごそ戦争負けでがらだね、してこつのほうさ、飛行機おづだわけよ。昭和何年だがなあ。してワそっから今度家がらしさ、あそこに道路こたただのカヤだのおえだ(生えた)どごでそれはけで(走って)、そのごの辺飛行機に見に行つたおづだどご。こづだなあ。あの辺だな。めであつたもな。(鉄塔よりも)ずっと手前だ。そして飛行機ほごして持つて行くには、そちがら、馬で、車で、馬で、ほごして持つてつたもんだ。飛行機しさ、ほごして。してあちやもつてつたんだ。日本の飛行機だ。戦争後だ。してこうこつから、持つてつてしさ。まずそういうことだな。」

(2)戦中戦後の思い出

I氏が国民学校4年生のころ家ではサルケを燃料として使用していたが、灯油も使っていた。電気がない時代だったので、照明には灯油ランプを使用した。空襲で灯火が規制されているときには、あまり外に光が出ないように笠を被せた。その頃、青森に空襲が来るとラジオが伝えた。稲垣にも来るという話になって、村の人々はリュックサックに仏様(筆者注:位牌か)を背負つて、岩木川の土手に様子を見に行つた。日が落ちた薄明かりのなかで、「グリーン」と米軍機が来襲するのが見えた。その後、日がすっかり落ちてあたりが何も見えない暗闇のなかで、また飛行機が来た。「ウーン」という音がしたかと思った瞬間、爆音が響いた。恐怖心のためにその方向を直視できなかった。場所を変えて様子を窺っていると、「パーッ」と音がして「バラッ」と何かが開く音がした。「うわっ、あれ爆弾だ!」と叫ぶや否や「ババババババ」と音がした。親子焼夷弾というものと、後で知った。火花のようにバパーッと広がり、バーン、バーンと音がして弾けた。こちらから山の向こうが明るく炎が上がっていて、青森の町が火事になっていると分かった。金木にも不発弾が落ちたと戦後になって聞いた。

戦後、アメリカ兵が稲垣の方面に来るという噂が流れた。I氏はアメリカ人が鼻が高いという話を聞いていたので、実際に見てみたいと思った。しかし恐怖心もあったので、友達と一緒に畑に植えたニンドマメ(さやえんどう)の茂みのなかに隠れて待ち伏せしていた。ほどなく、三菱製の車に乗った2人のアメリカ兵がやってきた。一人は運転し、一人は銃を構えている。「さあ来た!」と夢中になって身を乗り出したとき、前のめりになって転んだのか、興奮していたのではっきりとした記憶がないが、鼻を地面に打ち付け、鼻血が出た。非常に怖い体験だったという。

今だから打ち明けるが、戦争中、米や味噌を畑の穴に隠した。本家でも、大きな水甕に米を入れて隠し、他の場所には味噌や塩を隠した。防空壕の入口には、ゴミやサルケを持ってきてカムフラージュした。——「して、灯油、があつたな。して、そのあたり電気もねえときだつたはんで、そのあたり、ランプ。ランプだば今でもあるけれどもな。ランプ使つてだ。あどは灯油。して、空襲で電気つかねえときだあそれを使つて。あまりソドに(光を)出さないようにして笠をうん。(国民学校4年生の)その頃その頃。空襲くる。青森県さ空襲来る。その時その時さなつてもまだ放送つて、ラジオでしゃべる。でこたおらほさも来るつて、村の人だちリュックサックさホドゲサマ、しょつて、そごの堤防(岩木川の土手)さ見にいったもんだ。しぐそご青森だどごで。山越えればしぐそご青森だどごで。油川だの。そごさ見に行つたわけよ。してなんぼがうしあがり(薄明かり)のときだ。したきやこたぐー

んでアメリカの飛行機あ来たねな。してほんとに飛行機だいろ、ってみな土手にいで見でるもんだもん。してこだ、うしぐらぐ（薄暗く）なてまたいな。どごみでも目みえなぐなてまて、たきや、まんだ来たねな、飛行機や！たきやうーんてこうなたきやなだがいばだに音鳴りしたいな。こうなてるだがどどだわがらねけどな。おかなくて見えねね。でこだずっとあちにいで見できや、パーッ！！てしたもな。飛行機な。バラッ！！てこうなたもな。『おあ！あれ爆弾だべ！』って。たきやバババババババーッ！！ってなあそんどの、なだが、親子焼夷弾だってな。『あら！あれかまだろ』『あれこたもだべな』あでこたババババッ！！花火だけに、ババーッ！！って広がってしけ、バーン！バーン！て今度、土手にいでも、なも、火事なてまてるもんだもの、2～3発落ちだんだな。（こちらから）見えであったな。下は見えねえけども、山に陰なて見えねえけども、見えであったな。あの、炎だの、だば見えであったな。で落ちだどごつばバーン！。でその後なてがら今度あ、戦争負けだつてらだがとぎ、金木さも爆弾一つおちでるんだ。爆発、お宮のそばさ。下町っていうところに。そご、さ、爆発さねけどもな。うん。落ちでるんだ。そういうとぎもあつたんだ。してこだ負けだつたべ。それろ、アメリカの兵隊どこちや来る稲垣のほさ来るだづあ、こなたきやワラハドだどごで、アメリカで鼻たげつきやてど、それ見たくてまねでしさ。そのとぎ、今今のに、あのハダゲさニンドマメてわがてらな、こう、こう、なてでばな。道路こうあれば、そのニドマメのナガさ隠れだものよ。おかねふてしさ。いまこご来るだづあね！してこだゆしよ、おかがてさあ、なもかもしたて鼻たげえのみたふてまねだね。ふて来たいろ！…したきやこんだ二人して一人運転して、今の三菱のら。ムガシ三菱だったね。ああいうカダのやづ。乗ってさ。二人してさ。一人（は銃を携えて）こたにし右しだりに。なもこうそれ見でもうさあ来た!!たどごで鼻べさどうやて、ツヂさ、ツヂどやて、やたもだがわがねづぐづよ、したきや鼻血ではて血さま、おかねふて。してその前に、今、こしてしゃべたはんで、へなへだけども、のお、米だの、味噌だの、こんだ、隠したもんだ、各、ハダゲ掘って。しておえの本家でも、こつた大きいムガシのカメあるベカメ。こたこたつあ。アレさ米へだもだ。あれさ水はねてあ。それさこだちがるとさ味噌。塩。へだ。隠したずあ。して防空壕掘った。チヂ持って来て、してチヂもつてきたてあ、でまであしさ、こういうやづがら、どごもねものだもの、サルケどゴミどみだいじにして。そのナガさ隠れだんだ。隠れだ（笑）。」

⑩ J氏 昭和14年生(79歳) 女性

⑪ K氏 昭和36年生(57歳) 男性

居住の経緯 J氏は昭和14年に中泊町中里豊岡で生まれ育ち、21歳で嫁いだ。長男K氏が昭和36年に生まれた。

呼称 サルケと称した。——「その田んぼの下に、サルケです、何だ。」

使用年代 昭和30年ころまでは使用されていたと記憶している。ただしJ氏自身が生まれ育った豊岡ではサルケを使用していなかった。その理由を「木などがあってサルケはなかった」からだと言語。J氏が当地に嫁いだ昭和35年には、周囲ではまだサルケを焚いていた家はあったが、嫁ぎ先の家ではサルケを焚かなくなっていた。しかし昔溜まった煤が折に触れて天井から落ちてきた。——「うん小さかったどぎ。うんだなあ。中学校ぐらいだなあ。中学校終わった、頃だったの。その頃で、うん。夜して焚い、使った。私昭和14年生まれ。80だはんで（笑）。んだな、（昭和）30年、そごまでは使ったよな。」「ワアだば焚がねはんで、あの、こさ嫁なて来てがらそれ、あの、見だばって。うんだいたいこっちの話もきいぢゅうばって、あの、ワダヂ生まいだどごは、そのサルケ使ねどごであったはんで。してサルケ使ったのは、主にこういうふうにする、（岩木川の）ドデの。堤防の近ぐの人だちだはんで。このあたりの人も使ってた。（私の出身は）今のナガドマリだけでも。ナガドマリのあの、ほら、ドデこう行って橋わだつていげば、トヨオガってすどご。木とがって、そのサルケはながった。して（岩木川の）こっち側（西側）さ来てがら、嫁さ来てがら、それワ聞いだけども。嫁に来てがらは…ま、焚いだ家もあつたけども、その頃さなたきやもう、焚がねぐなつた。それでもこご、うっとムガシ焚いだはんで、何年もしし（煤）落ちであったよ。うん。記憶ある。」

定義・分布・質 J氏はサルケとは「草の根」であり、田んぼの下にあるものであるという。また、長男K氏によると、サルケとは「昔の草などが沈殿して固まったもの」だという。そして、当地から4～5kmほど離れた場所にあるカヤヤチ下にサルケがあり、採取していたという。——「あの、今田んぼあるでしょ。その田んぼの下に、サルケです、何だ。草の根？ってそれがいっぱいあるどごで」「乾いではばホラ、草の根だはんで、草の根が乾いではんで。」「K氏「（サルケを使ったことは）ないですね。あの…昔イロリあるじゃないですか。イロリに焚いてたんですね。うんあの、この辺田んぼ、区画整理して田んぼなっちゃうんだけど、その前、カヤのヤチ、カヤヤチだったんですよ。で、カヤヤチの下、10cmぐらい掘れば、昔の草とかがあの沈殿して固まった、ま、俗にいうサルケですよ。それがヤチ、ってこつから4～5km行つたところにあつたんですけど、それをきれいにのこざりみたいにく、切って持って来てましたね。あの、今サルケ見るっていったらいいの里にあるかな。」

入手法 田の下から自家用に各家庭で採取した。

採取の目的 田地の改良（客土）と燃料の採取を兼ねていた。——「田んぼの下がら。田んぼの上の、あの田植えしてるはんで土、あるでしょ。それをこう、寄せで、そのあるどから、こう、とって、そして採ったどさまだその土入れで。でそのサルケってしの出して、うん。焚いだ。」

採取の時期・場所・主体 春の雪解けのころ、4月末から5月ころの田植え前に、田の下から採取し、田のクロに積んで乾かした。サルケを切るのは男性で、女性であれば上手に切れないという。J氏は子どもの頃、その光景を見た。——「サルケがあ、いや春、春雪解けどぎ、何月頃かなあ。5月、4、4月の末か、田植え前に、うん。 乾がすの。」「（サルケを採ったばかりの田は、

田植えを)する。たんで、ほら、田植え前に、それをあの、田のクロさこう、積んで乾がして、置いて、(田を)植えだ。」「(サルケを切るのは)うんオドゴの人だ。女だば切るに上手に切れない。(手伝ったことは)ない。ただ子どものづぎ見ただけで。」「

採取法 田の土を一度寄せて、田の下からタテヨコ30cm×20cm、厚さは手でつかめるほどの、およそ15cmほどの四角形に、2段分切り取った。採取に使う道具は、平べったいスコップのような、柄のついたものであった。——「草の根？ってそれがいっぱいあるごで、その、ほら、ツヂを寄せて、そのとって、こう四角、んだなあ、30cmが20cmぐらいの大きさにして重ねておくの。乾がすのそして。厚さは…手でこうつかむにいいはんで、5〜6寸が。15cmが、の。とにかく手でこうつかむにいいはんで、ちゃんとわがねばってそのぐれでねえ？うん。田んぼの下がら。田んぼの上の、あの田植えしてるはんで土、あるでしょ。それをこう、寄せで、そのあるどから、こう、とって、そして採ったときまだその土入れで。うん。その採った土いれで。でそのサルケってしの出して、うん。焚いだ。んだいの、ワダヂ、あの、んだ。イナガギでは焚いであつたんだ。うん。」「あつたな。ちりとりみたいだずでもとこう、こう長さがついてあつたこつのほうこう平らでスコップどまだ違って、スコップはこう曲がってるでしょ。たんで、平らだ、柄があつて。何枚とったべ…。採った場所わがるだけども、で、一枚でねえ、何枚、(下に2枚くらい)…。」

乾燥・運搬・保管 田のクロに間をあけるように4〜5段に積み重ねて乾燥させ、のちに自宅へ運び、小屋に保管した。——「あの、ブロックでもこう重ねるのにこう、すぎま少しこう空げでこう。うん。何段ぐれえあげだべえ。4〜5段ぐれえだがな。(乾燥は)うんその、ずっと運べないごで、すぐ田のクロさこう。で乾がして。して乾がしてがらうえ(家)さ持って来て。さあ、それだばわがんねえ。とにかく乾燥させで、でもはごだのイヅだべの。はごできて。たんで運ぶどぎだばわがね。掘ったどぎだば。うん。わがるけど。」「(自宅に運搬したあとは)まず、こういう小屋とがしさ、そういうどき置いで、冬に、マギどいしょに焚ぐんだけどもさ。」「

用途 サルケで飯炊きをしたという話は聞いていない。当地に嫁いだ昭和35年にはストーブにハガマを載せ、木を燃料として炊事をおこなっていた。シボドは潰さずにストーブと共存させ、汁物の調理に用いた。昭和36年生まれJ氏の長男K氏も、子どものころに炉で魚などを焼いているときにサルケの話を聞いた記憶がある。その頃の燃料はすでにサルケではなかったという。出身地の豊岡でもストーブにハガマを載せて炊飯をおこなった。また、汁物は違うナベでストーブに載せて調理した。ストーブにはさまざまなワッカがついているので、ナベやハガマの大きさに応じて変えた。同じころ、昭和35〜36年頃に、ガス釜が用いられるようになった。電気釜を使用するようになったのはつい2〜3年前で、長年ガス釜を使用していた。理由は何故かわからないが、最初からガス釜を使用していたからその習慣が継続していたのだという。今電気釜を使用するようになって比較すると、ガス釜の良さとしては、炊き上がりが早いこと、ベチョベチョしないことなどが挙げられるという。また、長男K氏によれば、現在つがる市稲垣の施設「いこいの里」では防虫などの目的でサルケを定期的に焚いているという。——「サルケでご飯炊ぐのは聞かねえな。こさ来てがらだば、木でやったはんで。ストーブで。ストーブ、ベツにあの、ストーブでやってあつたはんで。シボドはシボドで(潰さずに、両方あつた)。(ストーブに入れたのは)ハガマ。うん。ハガマでご飯だけ。と、味噌汁はあの、その炉さ、ストーブで、やったはんで。んだな、ウヂもサルケ焚いだのもずっとムガシだねな。(中泊にいた頃は炊飯は)ストーブで炊いだ。ハガマ。ご飯炊ぐときはハガマ。して、あの、オツユとは違う鍋で。そのストーブもワッカの大きさに。こごさ来てがらも炊いでだ、して、で、ご飯炊いだのあ何だ。ガスだの出でだの何年だべ。それでも(昭和)35〜6(年)になってがらべがもう。ガス釜でぎだの。まっと遅くてあつたべがの。ワダヂ電気釜だのずっと使わなくてあつたはんで。ガスの炊飯器は。ずっとガスの炊飯器で来たはんで。何でガスのほうがいんだがさ、ガスのほうがいいって。最初からガスのカマ使ったはんで。して、つい最近まで。まだ、ガス釜…。今は使ってねえけども、2〜3年前から使ってねえばって、ガス釜はな。でも電気のも、ふけいさつか、たいげ電気も使ってだな。ガスも使ってる人もあるけども。ガス釜ははやぐでぎるしほら。うん。炊き上がりが早いし。電気ど違って、なんてへばいんだ。べちよべちよしない。うん。あの、ガス釜使ってれば。(嫁いだ昭和35年)うんその頃は使ってながったけどもその前、使って。」「K氏「で(いこいの里では)、たまーに、サルケも焚いたりしてますね。結局、サルケ焚かないとあの、カヤヤネが、虫、巣作っちゃいますんで、ネズミとか、結局防虫も兼ねて年に1回ぐらいは焚いてると思いますよ。」「うちの場合は、結局エコウ、あの、本家はイロリとかあつたんですけど、うち分家だごで。分家だごでイロリ、とかはない、ね。私自体、昭和36年生まれだごで、こ、この家建ったのが私小学校4年ぐらいの時だな。うん。(サルケを)使わないちゅうか、もうないですね。うん。隣ウチの本家なんですよ。ウチの本家にイロリあつてね。結局こう、イロリで魚焼いたりなんだかんだやってる時はそのサルケの話とかよく聞きましたね。うん。ま、ウチの本家も私のちっちゃい頃はもう炭使ってましたけども。うん。」「

操作 サルケだけで焚いてもよいが、マキと一緒に焚くものであるという。乾燥しているのでマッチ一本で火がついた。——「冬に、マギどいしょに焚ぐんだけどもさ。ナンモ、サルケだけでは焚いてもいいけども、マギと一緒に焚ぐの。うん。シボド、もどこごにも炉あつたはんで、あこにも炉あたはんで、その、どさ。うん。ムガシはな。今だば炉もなぐなつて、ストブもなぐなつて。(着火は)乾いでればホラ、草の根だはんで、草の根が乾いでるはんで、うん。火つけるに。マツで。火つけで。道具がなが使ったべが。ちよとわがんねえな。」「

副産物 煙がひどかった。嫁いだ頃には嫁ぎ先ではサルケは焚かなくなっていたが、夏ごろになるとチョコレート色のドロっとしたものの(煤)が高い屋根裏から落ちてきた。

ニオイもあった。J氏自身の家では焚いていなかったの、逆に焚いている家の子どもの服に染み付いたニオイがよくわかった。——「煙はすごがったよ。つたんでこごもホラ、サルケ焚いだウヂだはんで、んだなあ、冬、今ごろ冬焚いで、今ごろさ

なれば、これこだ、なつだ、チョコレートみたいドロツとしたの。の。こう落ちで来るんだ。今は天井張ってるが（落ちてはこない）。そしてあの、あの、ムガシの家はあの、ハッポウハッポウってあったきや。そさぬげるにしちゅばてながながの。したんで天井張ってなくてさ、山までずっとこう見えでさ、そういう感覚のえであった。たんでホントに今ごろさなれば、こう天井がら、落ちで来るんだよ。ニオイもあったよな。たんでワダヂ子どもの頃でも、そのサルケ使ってる、家の子もだち、フグさもニオイがついで、わがってあったよ。」「嫁に来てがらは…ま、焚いだ家もあったけども、その頃さなたきやもう、焚がねぐなった。それでもここ、うっとムガシ焚いだはんで、何年もしし（煤）落ちであったよ。うん。記憶ある。」

その他 J氏が生まれた豊岡ではサルケを使用していなかった。サルケを使用するのは、主に岩木川の土手近くの集落だという。——「あの、ワダヂ生まいだごは、そのサルケ使ねどごであったはんで。してサルケ使ったのは、主にこういうふうにする、（岩木川の）ドデの。堤防の近くの人だちはんで。このあたりの人も使ってた。」（2018年7月1日取材）

⑫ L氏 昭和11年生(82歳) 男性

居住の経緯 L氏は昭和11年に繁蒔（筆者注：現在は大字繁田の一部）で生まれ、昭和40年代に当地へ移住した。L氏によると、繁田は繁蒔からの分家が多いのだという。——「（私はここの者ではなく）シゲヤヂのふとだね。まだ来てがら50年が、50年。まだ来てがら50年だ。」「シゲヤヂの村だば代々古しいはんで、こちはシゲヤヂ、シゲダはや、シゲヤヂがら来た別家した者ばかりだはんで。代が浅くてまいねね。」

呼称 サルケと称した。

使用年代 L氏はサルケを見たことがないという。L氏よりも30歳から40歳ほど年上の人でなければ分らないと語る。——「ない！オラよりめのフトだね。手伝ったごともねであ。ううう。オラなもわがねね。オラよりもっと早い代だもの。見だごどもねであ。こちや行けばやあ、こちのブラグさ行けばもとおべでらね。シゲヤヂ。こちシゲタだはんでろ。シゲヤヂさ行けばさ、ガッパど古しいカマドだばりだはんで。（私はここの者ではなく）シゲヤヂのふとだね。まだ来てがら50年が、50年。まだ来てがら50年だ。」「（切る大きさは）わあそれわがらねね。オラのずっと何十年もめだもの。オラより30年も40年もめえでねば。オラの孫ジッコせ、オラも今82だばてや、孫ジッコだばろ、もう50回忌過ぎでまってるばって、その当時の、だねサルケ。うん。」

定義・分布・質 L氏の出生地である繁蒔ではサルケを使用していたという。場所によってサルケの質は異なり、「ネンバマジャリ」のサルケは「ネバチチ」（粘土）が混ざっているの、燃えにくい。「ホントノイサルケ」でなければ燃料に適さないのだという。——「（シゲヤヂではサルケを切っていた）んだんだ。ハンダチ（羽立）でもやってるし、どごでもやってるべ。」「（場所による違いは）あるある。ネンバマジャリのサルケもあるし。ネバチチな。ネバチチおべでらべ。粘土。アレだば冬さなつてら燃えねえね。ホントのいいサルケでねば。（ホントのいいサルケの呼び名は）わがらねえ。あちやいぎやわがるね。ネンバ、粘土、粘土まじやりだね。ほれだばや、冬すすたいでもなも燃えねえね。ツヅまじやてるだもおして。ヘクサイの、100歳の人だばわがるね。ワきやまだ80がナンボだもの」

採取の目的 田を植える前にサルケを切り、客土してから田を植えた。田地の改良を目的としていた。——「（田んぼ植える前に）んだ。切ったりして、切ってろ。チヂやって、それがら田んぼ植えるだでばの。（田をよくするために）そうだそうだ。」（2018年7月1日取材）

⑬ M氏 昭和9年生(84歳) 女性

居住の経緯 M氏は昭和9年に牛潟で生まれた。昭和29年、20歳で繁蒔の男性と結婚した。本家の二男だったので、兄夫婦ほか本家の家族と同居しながらの生活を10年間続けた（「本家に仕えた」）。嫁ぎ先の姑は、30代で亡くなった主人に代わり一家の中心的存在であったので、非常に厳しく細かい人だった。胃が悪い時に配置薬を飲んだところ「誰が薬飲んだんだ！」と怒鳴られることもあった。嫁ぎ先には家族が7人（男3人、女4人）もいた。風呂はあったが小さな木の風呂だったので、自分にはいつまでたっても番がまわって来なかった。入らずに辛抱したこともよくあった。

昭和39年、30歳のときに当地（繁田）に小さな家を構えた。主人は体の強い人ではなかったが、よく仕事に励む人であった。平滝の畑にスイカやメロンなどを栽培したが、うまくいかなくなってからは、タマネギとジャガイモを育てた。スイカであれタマネギであれ、選果や出荷の仕事があるので、お盆休みはなかった。息子は大工として働いていたので、仕事を休むことが難しく、田植えの5月と稲刈りだけは手伝ってもらえたが、草取りなどはそれ以外の作業はほかの者がやらなければならなかった。孫が生まれた時も、主人も一緒に孫の世話をしながら、田の草を採った。息子のお嫁さんが帰って来るのが遅ければ、夕飯の支度をした。かけずり回って、本当に頑張った。だから、仕事ばかりで、ほかの人のように、今まで外に出歩いたことがない。

牛潟の生家も分家だったので、生まれたときから本当に苦労したが、頑張った。しかし昔話をするとき「昔の人はなんてアホなんだ、頭が足りないんだ」と言われるので、昔のことは語らないことにしている。どれほど生活に苦労したかということなど、絶対に言わないし、語ったこともない。言えば間抜けだと言われる。だから、黙って食事を食べて、何も言わないのが一番いい。本当に自分は苦労したと、そんなことを口にしようものなら、昔の人はバカだとあしらわれてしまうので、喋らないのが一番いいと思っている。

これまでほとんど通院したことがなく、薬も配置薬以外飲んだことがないほど元気だという。足腰が悪く神経痛もあるが、元来病院に行くことが好きでないの、いまも行くことはない。——「オラまださ、まんだ、病院さだのかがつたごどねず。ほれえ。なあ。(生まれは)昭和9年。したばって、オラ嫁なって、こんだ、はえどご、は、20、20歳のどぎに嫁になってきても、まんず病院だのさかがつたごどもねし薬も飲んだごどねし、へばさ、家の今度、年いった、あの、バサマ、あの、おら、まんず親の、次のバサマもあつてらたもんだもの。そのバサマ、そしてばらカマドやてきたもんだごどで、に、今度、あの、そのバサマの、つ、オジチャ三十なんぼでなぐなつたもんだごど。たごどで今度、そ、はえどご、あ、そのオバチャばりカマドやてきたもんだごどで、たあ…んだ(感情を込めて)きびしふてまでで、んだず。そうやってワ、したんでようぐそれでもし、オラだば薬だの全然、飲まねばて、薬ちゃんと薬屋おいでつた薬、の。それえばぬ、へば、はえどご飲んだりすでばの。な。胃、わりばよ。へばほら、「だ、クスリ飲んだだばあ!」。はあ、でこんだオカネ払るにすあ。こだそんだだでば。の。ワしたはんで、オラだばホントに、フルさも、なも、人数よげで、んだでばはえどご、ワイ、全部てへば17人もナンボもあるもだもの。な。へば、なも、へこた木の風呂だもだもの。オラさだきや番こねだあ。へばなも湯さはねで、まんず湯さもよ、まずなもはねな。んだよー。したはんで、オラだば、ナンボしても、あの、嫁こなって来る前に、の、ウヂも、あれ、辛抱で、分家だエだごどで、辛抱辛抱であつたごどで、オラその辛抱だばナンボでもしこへだわけよ。(生まれは)牛瀉。だごどで、何でも辛抱したんでいま、今でもほだず。な一ぼでも辛抱へだごどで、アレしたばって。な。ワゲふとにかつてしからえるはんで。アレだばって。」「悪ぐもなねし、今もって、まあんずホントに病院さだの、して、少しぐらいいぐなくても、やっぱり、年だし、な。あつこつ神経痛。神経、まずな。ムガシのふと神経痛だのなんだのてすごどで、な、腰もいぐねし、足もしたはんで今なんぼしても、たげだば、よげこう、腰だの腰にんたどももってやっぱりまねいな。うん。腰もいぐねしさ。それでも、病院さだの全然いがね。わ、病院さかがるずすぎでね人で。」「なも、オラだきやオジで、今こそしての。こしておっきいウヂたでこしてるばて。それでもほら、ヤシギだばこうおっきいいどさ座らさつたばって、したはんで、アレだばって、それこそ、の。家のこんださ、何人も。オドゴ、3人だべ。オナゴ4人、7人も、あるどさ来たもだもの。へば、な。オドゴ今度ふとりだば、の。本家の。お父さんだべ、その次えの、オジチャで、そば、さ、したごどで、わつつかだエこ建でですさ。なあムガシだものなあ。なぼオヤゲでも、んだば、たんでなんぼ苦労しただがわがねだて。」「……んだねな。したってさ、今だきや、なだかだしゃべらいねだて。たんだムガシの人なぼ、ほ(ほんつけね)、な、アダマねもんだべ、これだ。したはんでなんも、なんもムガシのごど(人には)なもしゃべらいねえ。オラだきや苦労して今なんも、こつたやづたなんて、絶対しゃべね、オラ。はあ。しゃべたごどあね。さべればさ、な、なんもアダマねもんだべなつて、今でもんだ、まずやしたはんで、どんでも、かへるもの食つて、そして、の。黙つて、食べで、しゃべねばいぢばんいい。それでも、そつたオラだばホントに苦労してあれだでやつて、そつたやづしゃべれば、な。ムガシの人バガどフトヅだあんだこだつて、い、いつかささえでまるはんで。しゃべねばいづばんいいどもって、黙つて、よげしゃべね。今でも。おら、特別、ホントにあれだ。オラだば頑張つた。特別頑張つただね。うん。そのうち今度さ、えの、オジチャ今度、何でもはいきたずので、と、んだつて。こど、ワしたはんで、今度、こどアレだでばの。あの、お父さんもお母さんも、オエでムゴだんだ。したごどで、お父さん今度ダイグだごどで、た、5月ど、稲刈りだば休むばて、あどなも、の。え、カマ、あのあだりだばなも、機械でカマかるクサ刈るずごどね、エでばりこして刈つたもだもの。それでこど、エのおじちや(主人)こど、山の山、あの、平瀧つてすど、牛瀉のそば、そご八町歩、あの、山おごしたごどあつて、それ田の、田の名前なつてすさ、たごどで、減反なるだでばの。一町歩ずづ8人して、一町歩ずづ、今度、まんず、買っただでばの。へばさ、えのお父さん(息子)もお母さん(嫁)も、『何そつたらだもの、いまそつたらだやづ買って』てこさえるごどで、なしたばつておじちやこんだなんもかもまだおじちやまだシゴドすふとであつただね。シゴドもいふてあたし、したばて体あろう、やばりいぐねどごあつてさ。したごどで、たんだ、こんだ孫でぎだつきや孫ばかであるながら、むたどそのや、田のクサかてけで、そしてまだ山のハダゲさ今度1町歩ずづわけだもだもの、それさスイガはじめスイガだのメロンだのつけで。そのやづまねぐなつてから、タマネギどジャガイモつけだもだ。盆だのなも休みねふてあたのおらだづ。みなこだそれ、こだ、ろ。ジャガ、あのスイガだのこど、選果して、出しねばまいんだでばな、そしてこんだまだ、ジャガイモもこんだタマネギもほんであたすあ、したごどで、盆だのえんとそうやしんでえね、そのづぎ盆だのにむたどみがぐべどすべてそすて、やたもだものお。たつて、ナンボオラだきや苦労したが、子どもだち、孫二人かであるながら、い、むたどいそしにはけであるて、それでもこだエさ来ればおかあさおせえば、今度、ん、ま、ま、まやねあまねだけな。ワしたはんでよぐホントに。ワゲづぎつてあお頑張つたもんだきえあなでもって。そうもつたつて。頑張つただホントに。たんで、ホガのふとだけに、まずどごだかだも歩がねね。ただシゴド一本でオラ。うん。」「わい、んだのお、20なつて、嫁こなつて来て、そして、10年本家にいだわけ。ろう、10年もいであつて、それで、それがら、へば30だでばの。30なつてがら、べづ、こさ、べづに来たもだもの。」

呼称 サラケと称した。

使用年代や地域 昭和29年に繁蒔に嫁いだ当時も、サラケを焚いていた。また、昭和39年に繁蒔に家を建てて以降も、当地で盛んに使用した。当時この周辺では多くの人々が焚いていたのではないかという。——「んだな、30なつてがら、オラダづ、そのサラケやつただでばの。うん。んだず。そのめ、にも本家にいだづぎもナンボがんだ、本家(繁蒔)にいだづぎもサラケたどりしたでばの。んだ。サラケんだんだ。んだ(盛んに焚いたのは)こつあきてがらだでばの。」「(本家は)繁蒔。シゲヤヂてそごの道路、道路のそつたあ、繁蒔だもの。んだなあ。(稲垣周辺だと)みなただべにの。ワそもてらよ。あのあだり(当時)だばみ

なただでねえ。うん。だいたいみな焚だんたよお。」

定義・分布・質（差異・評価） サラケは「ヤヅのツヅ」（湿地の土）であるという。ヤヅとは、簡単にいえば馬に食わせる草をとる場所のことである。その表面をサッと取りのぞいた下に、サラケがある。サラケを使用するのはこちらの方面（繁蒨、繁田など）で、出身地の牛潟では山があり木が手に入るので、サラケは使用せず、一年分のマキを貯えておくことができた。——「サラケ？ おああるあるある。オラダヂサルケ焚だもんだもの。サラケさ、あれだず、こさ座れ、サラケあ、ツヅ、はえどごさ、あの、ツヅてすばいんだがの、ヤヅだでばの。ヤヅのあの、ヤヅこうサッとこうとて、その下もサラケあるわけ。そのサラケ採って、うん。そして干して、そして焚だもんだよ。オラだぢ。サラケ。ヤヅってへばさ、あまず、わ、や、はえどご、あの、マ、馬にかへる草刈るどごヤヅてすわけ。ヤヅだでばの。うん。そごあらほら、アレだづ、その、どっからこんだこう、あれだづ掘って、その下にそのサラケあるわけ。」「牛潟だばよげえ、木。木。山。山あるどごで。（サルケの話は）こつ。んだんだ。オラしたはんで、わあだぢ、牛潟だばさ、木、あの山あるどごで、山がら木、切って、そして、の、そしていっぺマギ、マ、マギ、いちねん焚ぐやづこさつとやってるどごで、サラケそう焚がねもの。こづばりだず、サラケ。焚だての。焚くず。」

入手法 繁田にある湿地から、自家用に自給的に採取した。売買することはなかった。——「（売買は）なもなもなも。だもだきゃ売ったり買ったり自分で、自分だぢつかるぶんしかだもやんねえんたその、な。売ったりそつた、んだって。そしねもの。」「（サルケを切ったヤチは）うんシゲダにあるだヤヅ。あるだね。あづ（船越のほう）にもあばて、今だばほら、みな田んぼになってまっただばって、あの、あれだあね。ヤヅだきやうってあってあったもだね。それはどうってまだ、んだの。それでもまだたげ遠、ふても遠げぐもね、まず、自転車だのでそひての。あるたもだものな。」

採取の目的 明確に語られることはなかったが、サルケを燃やしたとの話から、燃料にすることも目的の一つであったようだ。

採取の時期・場所・主体 サルケは田植え前の春に（田ではなく）湿地から掘った。切る作業は男性が主体だが、運ぶときにはM氏も一時的に手伝った。——「そのサラケ今度、こう切ったオドゴの人どころ切って、ほら、それ今度こうしてあの、まず干すだでばの。うん。干しておで、それ、アレだず、すれば今度あウツさ持って来て、うん。そして、冬にむたどサラケばり焚だでばな。（切るのは）田んぼ植える前。アレ、アギさなつてがらだべが。あの、秋さなつてがらサラケ切るでねべがのお。そしてこさ干して、そしてまんだあれだでばの。あの、あつあなつてがら…あれ春だべな。春掘って、して秋さなればそれ焚ぐだべの。アレ、干しておいでほら。サラケ。うん。（切るのは）オドゴのふと。さなんだが切るものあるだね。てさ、んだずあ。それ持ってこしてほら、切って。んだず。今ほとんどオドゴのふとばりやるでばの。女のふとだきやなもやえねね。やえねね。オラなも別にそた手伝るて、そう、配るづぎだばの。いとごまてづだうアレだばて、オドゴのふとばりほとんどやってるんたよ。」「（切った場所は）ヤヅ。んだ。はえどごヤヅだでばの。」

採取法 縦横1尺四方、厚さは2寸ほどに切り取った。——「（大きさは）たげこう、こ、んだな。こちばりだな。んだな1尺だばあるな。1尺だつきやあるある。うん。ある。んだの。厚さつて、このぐれえだぎや。厚さ。2寸ばり、な、なてへばいいんだ。10cm、だぎや。な。それ今聞でなにあだもだ。」

乾燥・運搬・保管 湿地でサルケを切ったのち、田のクロに積み重ねて乾燥させ、相当の期間が過ぎればひっくり返して積んだ。この作業は女性にはできないとM氏は語る。だからM氏は手伝ったことがなく、もっぱら主人がおこなった。自家製の縄で10枚ほど縛り、ソイコ（運搬具）で家まで運んだ。小屋の空いている場所に積み重ねて保管した。小屋の中にはサルケを保管する余裕はなかったが、濡れないようにどうにか入れ込んだ。——「切って干してほら。んだず。んだんたよ。んだまずほだでばの。そのほら、ヤヅだどごで、んだまず田のクロみたそたどさ干すだでばの。（ヤヅなので）田で（は）ねえ。ヤヅ。んだ。はえどごヤヅだでばの。どった風につてこう、今さなればたげこう、な、忘れでるんたもんだえあ（笑）年いってまってるし。な。んだ。こう重ねて積んでるんたな。積んでこう、たげ暮らへばまんだとつくらがしたりしてらあ、干すだでばの。うん。そう、そういうんたな。んだよ。オラそう（ひっくり返すのは）やんね。んだ。おじちやばりむた。な。うん。もですこんだばおなごのふとやれねもの。な。たどごで、オドゴの人ばりまずの。んだ。くばたりすずぎだばの。あの、手伝うばって、それこださ、あの、はえどごナワだでば、ナワなつたナワで、こうしば、さ、10めえなら10めえてこうかさ、縛って。そしてエさもてくるだでばの。うん。」

「ハシゴつてさ、あるだね。あの、ソイコだつてさ。そいさ、あの、アレだず、サラケだの、今度マッコにかへるに、ヤヅの、はえど（ご）クサ。まるごつたやだの。しよいさこださ、ムガシだば、あの、田んぼの、稲も、そのさ、の、ハシゴで、ソイコだつてさ。そえてそつて出したもんだもの。ん。んだよー。（持って来て）どごにつてはえどご小屋のさ、小屋の、アレだず、まずエド小屋の、あんでこうあでる（間があいている）、こう、まんず、何てへばいだ、そごあんでこあでる（間が空いている場所に）、そちやまいで（積み重ねて）おぐわけ。あでこあでるって、な。なもサラケだのへるどごもねたもだでばな。それでも、濡れねえようにして、してさ。そうやって。置だもだあ。（壁に置くことで防寒という意味は）なもなも。べづに。」

用途 冬は常にサルケばかり焚いていた。その火にあたり、暖を採った。煮炊きにもその火を利用した。「カギの」もの（カギノハナ、自在鉤）にナベをかけて、炊飯を含め、煮炊きをおこなった。炊事の場合にはサラケも使用したが、カヤとごく少量の木を用いることがほとんどだった。採暖にサラケを使用しない時期には、サラケを炊事に使用することはなかった。マキストーブの時代になると、マキストーブでサラケを燃やし、炊事もストーブでおこなった。

本家の次男に嫁いだM氏は、田植えの時期になると、午前三時に起きてカヤで炊飯し、冬に漬けた干し大根の漬け物とともに

にコダシに入れて背負い、田に出かけた。朝食の前に一仕事し、その場で食事をとり、堰の水で食器を洗った。堰からウルメを網ですくい取って煮て食べることもあった。「今の人はすこし何かあると栄養失調になって騒ぐが、私たちはそうやって暮らして来ても、何ともないものね」とM氏は語る。——「ご飯…なもガスだのねしな。したどごで、それでもだでねぎゃ。あの、サラケ焚でも、ストップ、な。はえどごストップだばママ炊だりしたべ。はえどごさ、はしめだば、アレだよ、あの、何てへばいいだ、あの、マギだのしたはんでサラケだの焚で、カヤだの、ま、サラケだばアレだばって、木わんつか焚で、カヤ。カヤだでばの。ヤヂだもの。その、ヨシ、ヨシ刈って、それ、それ焚で、ママ(を炊いた)。ほんだって。オラだち、田植えだのってへば、アサマに三時だのに起ぎで、その、アレだて。あの、ま、マギってなもマギ、はえどごそのや、アレだず。ヤヂの、ね。その、あ、か、カヤだでばの。カヤってへばいいだ、それ、焚で、そしてママでがして、そしてろ。田さ、アサミシメ(朝飯前)がら、ミシメがら、そのママ持って、そして、行がにやまねだもの。へーばさ、オラだきや、アレだず、うづ、あの、オラおばだどごで、おんじさ来ただどごで、たどごでまんずオオヤゲのな。アレだどごで。たどごでろあ。そうして。あの、コンダラ、コ、はえ、コダシだがらそれそって、ママな。たた、ママど、それさ、ダイゴン、干しダイコン、冬につけておいだ。の干しダイコンど、ワしたはんでようぐそうやって、食って、そうしてばりいるあ、の。アサミシメから行って、たげアサマたげ田植えやって、こだママだあ、ってへば田にいでママ食て、そして今だけになもクスリだのなも掛けでねどごで、あのへぎの水で、茶碗こ洗ったり、の。そうしてれああ。そしてはえどごそのへぎ、がら、アミこ持ててオドゴのふとど、そしたふとど持ってって、へば、あの、アレだず。ウルメこだのなんだかだこう、すくて、きてそれ、の。煮で食たり、らあ。そうしたもんだあ。な、わしたんでよく、いーまの人わんつかあれだば、らあ栄養失調になるえになあんだこだてすばて、オラだちへばそうやって暮らしてきても栄養失調もなもなねしの。」「サラケでて、割合にアレでねえ、サラケでそう、サラケでもただばって、カヤでアレだでねが。ご飯たいだんたよ。」「はえどごすさ、こして座ってればの。なも火もなもねばさびしてまねどごで、サラケこたでそして、へば、なぼが暖かいでばの。して、んだんたよ。まんずな。煙もんだしたどごで、わい、ホントにぐっと体もなもどごもかもサラケのニオイだべねの。んだずあ。それさワよげわがね人だはんで、ただシゴドシゴドシゴドってシゴドばりして、どさもあがねで暮らしてまったふとだだね。あまりホントに、んだずあ。まず辛抱ってへばいいがら、うん。なも(ストーブではなく)ただシボドで木こわんつかへで。そひや、サラケこう。やってすさ、へばサラケさ、火こつぐきや今度。そひや、へば、やってばりやるだでばの。(ナベで炊飯も)な、まんずんだそれでもな、あるでばの。こう、すせあ、あの、こう、なんだがら、なんてへばいいだ、カギの、それさ、今度の、な、ナベ。ナベもこうの。それかげで、そしてやったり。さ、まずしゃまじゃまだでばの。(サラケでの煮炊きも)あるよ。うん。うん冬。ナツだばそう、アレだきや。たんでベツにの。うん。つかねな。うん。冬だ。まんずほとんど冬ばりだべえの。サラケ焚ぐしの。」「冬にむたどサラケばり焚だでばな。」

操作 シボドに2〜3本ほどのごく少量の木を入れ、サラケをのせて火をつけた。——「こう、まず、さ、あの、なんてへばいいだ、シボドだでばの。シボドさほら、こう2〜3本たで、それさサラケこう、やって、そして、ばりやたもんだものしさ、な。んだよー。わさはでな。そうやって。」「なも(ストーブではなく)ただシボドで木こわんつかへで。そひや、サラケこう。やってすさ、へばサラケさ、火こつぐきや今度。」

副産物 サラケは冬に常にいぶっていた。若い時、体中にサラケのニオイがして大変だったが、どうすることもできなかった。まわりもみなそうだった。——「へばこだそのサラケこだ冬に、むたどう、サラケいぶしての。そして、ろあ。そしてばり暮らししたもんだほれえ。オラダツ、あの、の。ワゲず、ワゲずぎ。ワイへばサラケのニオイしてうだできやなてな。そしたたてもなねきやな。みんなほだだものな。んだて。ニオイすよ。サラケ。そひてこだイブって。したどごで家もなもぐっとみなししけでまでばな。はえどごな。煙、なも煙アレだもだもの、えんとなも、な。あのそたやづねもだもの。」「煙もんだしたどごで、わい、ホントにぐっと体もなもどごもかもサラケのニオイだべねの。んだずあ。」

その他 84才になるまで病気になるず、病院にも行かず元気である。毎日、家のカグジで畑仕事をして草取りをして過ごし、週に3度、「湯ッコ」(温泉)に入りに行くことを楽しみにしている。最初は気が進まなかったが、嫁に勧められて稲垣の湯へ入りに行ったのがきっかけだった。最初は知らない人ばかりだったが、ここ数年通っているうちに稲垣の人達と顔見知りになり、今では「湯ッコ」が唯一の楽しみである。M氏は、20代で「オオヤケ」の次男に嫁ぎ、大人数の家族のなかで、風呂に入ることもままならなかったと語っていたが(「居住の経緯」参照)、そのような苦労があればこそお湯を楽しむにす気持ちも大きい。——「ホントにさ、ワしたはんでよーぐそれでも84なるまでこして、な、元気で、い、アレだきやな。って自分でつぐづぐそうおもるず。たんで、ホガのいんだんだワンツかいぐねば病院だきやな。オラまだワ病院だあゆえ好ぎでねえふとだどごで、なも、なもいづ死んだってなもアレだであどもってどごで、病院さだのまづいがねあのじよで。んだす。それでも病院さいがねふてもこしてんだす。それでも病院さ行がねくてもこしてなんぼがずづの、84なってもハダゲこでもなでもこしえろあ、な。クサとって、ハダゲ、カグジだの自分でまずの。やってるわけ。んだすあ。それでもろあ、わりあえにの。オラ元気だどごでさ。んだずあ。んだ。今度だっきや、あどますますいがねなもな。トシトシだものねあいつ死んでも今度だきやなんもだどもって自分でもそう思ってるどごでや。んだず。たんだそれでもまんだろあ、イナガギで、湯ッこさ、お湯ッこさ、温泉あって、お湯ッこさ一週間に3回行くにいいわけ。おっきいバスに乗って、それたんだだわけ。の。したどごで、わあそれもハシメだば、ワイ、だも、へばオラホヂでオラふとりだわけ行くづ。だも行がねだって。よそのふと。へばさ。エのおかさ、「オバチャやあ」「お義母さん」って。「湯こさでもあがながあ」「(温泉にでもお行きなさいよ)」って。そこでだ冬、秋さなればなもシゴドねぐなるべ。へばたんだエにいればすさ、「湯こさでもあるが

ながあ」。な。へばいいなっておもたばて、な、こう湯さいげつずいがねばまだなどもハシメだばそれでも湯っこさはてママもていって、湯っこさはって、そしてふともよげ知らねしな。イナガギの人みな行てらてまずな、あずばてまて、うって今何年がこううふうになったつきや、こだみなフトおべできてるきや。だどごで、湯ッこばり楽しみで。んだ。だんで湯ッこ、湯ッこさ行ぐやづばり楽しみさして、こう。いるずオラ。ほがのオバチャだぢだきやだもオラだけにこう苦労しねえホントに。ふふふ(笑)。まんずな。(2018年7月15日取材)

(2)つがる市稲垣穂積

⑭ N氏 大正14年生(93歳) 男性

居住の経緯 当地で生まれ育った。昭和18年に徴用され昭和23年に当地へ戻った。

呼称 サルケと称した。

使用年代 N氏が当地を一時去る昭和18年にはサルケが使われていた。昭和23年に当地へ帰って来たときには、N家ではすでに使われなくなっていた。——「(焚いていた時代は)終戦後が…だねな、何年ぐらいだべ。昭和の5～6年あたりだべが。まず、終戦、終戦後は使って…焚いでねでねべがなあ。わがねな。(何歳くらいまでか)それ聞がれればわがねや。うん。オラだちハタチの頃だば…わあ昭和



稲垣町穂積

和の18年からここにいねえどごでわがね。その辺は焚いであつたんでねがな。」「(自分は)ここで生まれだんだ。大正だ。14年。[以下プライバシーに関わる内容が含まれるので削除した]。(昭和23年に青森に帰ってきたときにはサルケは当地では)使って、ない。ねした。ながったづのは、ノウツ開放っておべでらべ。ノウツ開放。オオヅヌス(大地主)がらみなとって、分げでしまったどごで。大きい人も小さい人もひええぎなってしまったどごで、ムガシはたんで、田よげ持つてる人は田貸してれば1年に1反歩3俵ぐらいで貸してだんだ。な。ひやその当時5俵が6俵つたの半分ま地主さ取られるもんだでばな。へ、農地解放って、地主がら全部開放になってしまったどごで、ある人もねえ人も、みなひ、それこそ裕福になってしまったどごで、オラだち帰ってきたどぎは、もう、サルケは焚いでながったなあ。」

定義・分布・質 サルケとは、「草の根が蓄積したもの」とであるとN氏はいう。このあたりは湿地でも田の下でもいたるところにサルケがあるという。場所によって50cmから1mほどの表土で覆われており、「サルケヤチ」「カヤヤチ」と称する場所から採取した。サルケには質的な差異があり、土が多く含まれているものは重く、悪いサルケである。木の根が含まれているものでよく燃えるものが良いサルケである。その違いは、採取する場所による。田光沼方面は良いサルケが産出し、岩木川に近いこちら側の土地は、悪いサルケである。また、田光沼から山田川沿いに北へ行くほどサルケが多く、質もよい。両者を区別する呼び名についてはないという。——「サルケてな！ サルケてよ、草だの草の根だの、蓄積したもの。その上にツヂあがってだり。この辺は、まず何メートルも下までサルケずものあつたんだ。草の根ど、草ど、それが蓄積したもの。」「で、上はそのところによって、1メートルもツヂあるとごもあるし、50センチのそれツヂをとって」「(サルケの質に違いは)あるある。ツヂよげ。重いしさ、チヂだもの重いでばな。(それは)悪いサルケ。(良いサルケは)木の根とが燃えるやづ。全部燃えるやづ。悪いサルケはさ、チヂよげえ入って。(その違いの由来は)場所場所。あつあ行けば、はえ話田光(たつび)おべでらべ。田光沼とが、あいう沼ついだどごの、アレが、あの、そばは全部サルケいいわけ。陸地でもわがるべ、湿地帯だでばな。だんで、沼、はえ(はな)し沼ついでらどご、う。いいサルケあるだ。(良くないサルケは)岩木川のこつちがわさ。田光沿い、田光つておべでらべ、山田川の。あのへん。だんだんシモ(北方)さ行くほど、サルケよげえだし、いいのあんだね。稲垣から木造の間稲垣の今の旧の木造の間にある田光であるべ田光。あのハタはほとんど全部サルケいいわけ。(両者を呼び分ける名称は)なもそれだばねえ。」「うちのあたりだばそに、ムガシのサルケヤチだでばの。サルケヤチでサルケヤチだもんでねだね、でねんだ。カヤヤチ。カヤヤチ。サルケヤチでねもんだもの。」「この辺は。いやいやムガシがらただこづのこどばで言えばヤヅだべな。田んぼの下にもある。どごにもある。この辺は。トグベヅでねえ限りはどごこの辺でもみなあるみな下まで行けば全部。」

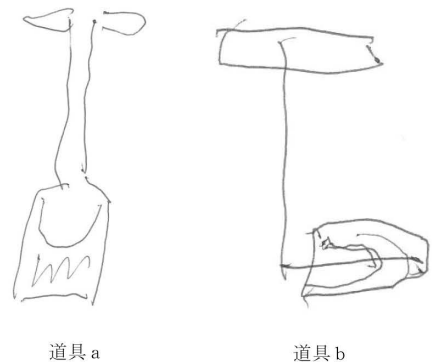
入手法 N氏の家は地主であったので、所有する未開発の湿地(サルケヤチ、カヤヤチ)を小作民に開放し、サルケを採取させるかわりに田地として開発させ、米を作らせ小作料を納入させた。——「しえもさ、したんで、あの、おう、その人によって、うちのあたりだばそに、ムガシのサルケヤチだでばの。サルケヤチでサルケヤチだもんでねだね、でねんだ。カヤヤチ。カヤヤチ。サルケヤチでねもんだもの。サルケあるどごはカヤヤチだ。カヤ。カヤヤチがてこんだあの、あ、普通の農家の人だちサルケ切らへでけえって、して切っててな。切ったあどさへばアレだよって、稲植えるよって、稲植えてひやこだ一反歩ナンボって小作料とるだでばの。だんで田にしね人は深くまでずと。(そのカヤヤチは地主の私の家で)持つてる土地。共有地はもつともつとムガシは共有地あつたでばな。全部共有地であつたものが、みんな分げで、田にしちゅうもんだもの。ムガシはアレだんだアレだでばの。ムガシの殿様のものあつて、分げでもらって、してごまがして田にしたもの田にしねえで、津軽の殿様が何万石たってその倍も、お金とってあつたんだでばの。お金で、こ、米とってあつたんだでばな。今のわけえふとつきや知らねえであ。」

採取の目的 N氏の家では田地の開発が主目的なので、深く掘ることはせず、1段に留めた。また、「山も木も何もないから」「焚くものがないから」「燃料として」用いたのだとN氏は語る。家庭により事情は異なり、N氏の家は地主であったことから、所有する土地に植林して燃料を用意したため、サルケの使用機会は少なかったという。つまり、N家の場合、サルケの採取は一に開拓であり、燃料の採取はそれほど重視されておらず、サルケはあくまで二次的な産物であった。これはN家が地主であり土地を所有していたことと、サルケ以外の燃料に比較的恵まれていたことなどに関係していると思われる。——「ムガシは、それはこの辺は山も木もナンモねどごで、焚ぐものねえがそれは、燃料にして使った。」「そのウヂによって、ムガシがらおつきい地主どがなんとがだつてカネあるウヂだばシミとが何とか全部買って、そのウヂのその、ウヂによって経済によつてさ、それぞれ、ウヂのあだりだば、ムガシは大地主であつて、林もいっぱいあつたがら、そのうち(時代が下ると)サルケってサルケさ、焚がねで、山って山た山の今のあだりだば河川敷に、や、あの木植えどごいっぱいあつたそれさ木植えで、へて木切つて燃しちやあどごで。それほどサルケ(使わなかった)、して普通、オグのそれ焚くだば、炭30だば30買って、その、うちの、暮らしによつてみなちがるだつて。いとまにサルケ焚いだどがなんとがたつて、そでサルケ焚がねずもあるしさの。林あるどごだば木焚ぐわけさ。」「サルケは焚いだな。焚いだてよげえ焚がねえ。オエだちのマゴジサマ××(職名)したふとだのさ。××(地名)の××(職名)。たんでその人の階級によつて、みな違うだ。でサルケを切つたあどさ、上のツヅあるでばの。それば寄せでおいでそれば下さ。サルケ切つたあどさこう入れでしさ。うん。した今度田植えす。稲いだべし。(田を新しく開くという)そういうごと。したんで、サルケとつてしまつてあど、あの、田にしね人は、ずっと深くとし、田にしひとは、上一段だら一段うな、何メーターだがつて、せあ上のツヅを下さドンで入れて、してこだ田植えるわけ。して田にする。(私の家では田地の開拓が主目的なので掘る深さは)まあ一段ぐらいだばな。」

採取の時期・場所・主体 田植えが一段落してから採取した。秋から冬に採取する人もあり、さまざまであつた。いずれにしても農繁期を避けておこなわれた。場所は、N家が所有する未開発の湿地(サルケヤヅ、カヤヤヅ)で、小作人を使って採取させた。——「これはさ、田植え終わつてがら。田植え終わつてしま(暇)だづぎ。あまり時間ねえとぎ。あの、い、冬、アギになつてがら採るふともあるしさまじやまだだよな。暇だとぎ。」「(掘る作業は)オドゴでねばでぎねえじゃ。(自分は主体的に掘ったことはないが手伝ったことは)それだばあるよ。オラダヅは切つたごどね。たつてウヂのたつて(父親は)地主だつたどごで人使つてやるどごですたごとしねえ(人をつかつて切らせたのである)。」

採取法 場所により異なるが、50cmから1mほどの表土を除去し、サルケの層に至ると右図の道具(a)で50cm間隔に縦長に切れ目を入れた。次に横に15cmまたは20cm～30cmほどの間隔で切れ目を入れた。次に右図の道具(b)で四角く穴をあけ、隙間を確保した。そのときに取り除かれるサルケは、重視されず捨てられる場合もあった。深さはおよそ30cm～50cmほどである。次に、Bの道具を隙間から水平にサルケの下面に勢よく差し入れ、引き上げた。切れ目を入れる間隔がサルケの1ブロックとなるため、力のある人となない人によって、差があり一様ではなかった。自分の力量にみあったサイズになるように工夫した。また、N氏の家ではサルケの採取よりも田地の開発が主目的であつたため、深く採ることはせず、1段分にとどめた。一旦除去した表土は、サルケを採取した場所に戻した。いっぽう、燃料の採取が目的である人の場合には、より深く掘つたという。——「で、上はそのところによつて、1メーターもツヅあるとごもあるし、50センチぐれのそれツヅをとつて、せばあの、なんてすあ、道具で、切つて。シカグに採つて。してへ燃料にしたの。この辺は。いやいやムガシがらただこづのこづばで言えばヤヅだばな。田んぼの下にもある。どごにもある。この辺

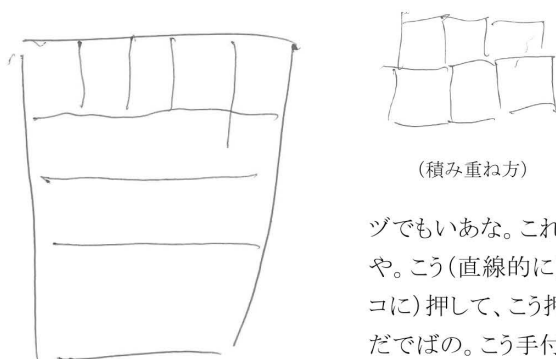
採取用具(話者によるスケッチ)



道具a

道具b

採取方法(話者によるスケッチ)



(積み重ね方)

(切れ目の入れ方)

は。トグベツでねえ限りはどごこの辺でもみなあるみな下まで行けば全部。(私が採つたのは)ヤヅ。ヤヅ。うん。どうぐな。書いだ説明すが。書くものあるな。ベツだ紙、おあトシいったふとでねあわがねでばな。フツと。あつ(向こうのほうのスペース)さ行つて説明するじゃ。書くものはさ、書くものは、書くのふえただけどさ。こうなつた、こう手付いで、こうなつて、こうなつて、こうなつたものの(道具a)あるであ。これで、田んぼさ、これま、田んぼでも、ヤヅでもいあな。これはさ、これで、ずっとこう(タテ目にまっすぐに)キズ入(い)で行ぐのや。こう(直線的に)切れ(目)入(れ)で、キズこれで(今度はヨコ目に)押して、こう(ヨコに)押して、こう押して、こうしてこうして入れて。そうえてさ、鉄だ、こう、こうなつたもんだでばの。こう手付いだの(道具b)、こういうもんで、こう、こうなつたもんだでばの。これでさ、こち、この、いちばんの下のこれ(最初に掘る1コマ目)は、まず一つ捨ててもいいばつて、こご(1コマ目が)こう空いだら、これ(鉄)でドン、と(サルケの下面に)こう(鉄

の刃を水平に差し込んでやるわけ。そえてこう(サルケを引き)上げでさ、こう、ちょんど、こう、こういうシカグだもの採って」「(サルケを切り取る厚さは)ちょんどその人によってで。50cmにすふともあるし、30cmにしてもいいばたて。運ぶ人のあの、あれで。深さだものシカグに採るシカグだもの。シカグに。たんで、これが、ちょうどこえんたもんだして、この幅(ヨコに切れ目を入れる間隔)はせまぐすだ。これ(ヨコ幅)は50cmでも、ここ(切れ目の間隔)は20センチが30センチでも(でなければ)、かがねべ。乾がねべ。そでねば乾がねべでな。これも50cmだば乾がねべ。簡単にやればこれのおっきいのよ。うう、長方形にして。ううん、薄く。さまざまだね。(私の場合は)ここ(切れ目の間隔)を取ってへばな。やっぱり15センチ(ほどの間隔を取る)がな。これ(その間隔が)、よげ(大きい)だば、乾がねはんで。これもだんでいたいシカグにさ、さまざまや、自分のシゴドしやすいように、(人によっては)こづ(ヨコ幅)50cm、こづ(切れ目の間隔)30cmにしたりして自分のシゴドの都合によって。うん。ツカライいい人はこういう具合にして採るはんでさ。上げるにツカライいい人はおっきくしてみるだて、ツカラねえ人はあげれねえべ。これはだいたい、これはあづぐなおして、これよりあづぐしたら乾がねべ。」「(道具の)名前よ、いま、イナギの、資料館あるだいな。茅屋根の。あすこさ行けば確かあるはずだ。」「切ったあどさへばアレだよって、稲植えるよって、稲植えてひゃこだ一反歩ナンボって小作料とるでばの。だんで田にしね人は深ぐまでずっと。」「でサルケを切ったあどさ、上のツツあるでばの。それば寄せでおいでそれば下さ。サルケ切ったあどさこう入れてしさ。うん。した今度田植えす。稲いだべし。(田を新しく開くという)そういうごと。したんで、サルケとってしまつてあど、あの、田にしね人は、ずっと深ぐとるし、田にしひとは、上一段だら一段うな、何メーターだがつて、せあ上のツヂを下さドンて入れて、してこだ田植えるわけ。して田にする。(私の家では田地の開拓が主目的なので掘る深さは)まあ一段ぐらいでばな。」

乾燥・運搬・保管 切ったサルケは、間隔を開けずに5〜6段に積み重ねた。夏から秋にかけ乾燥させ、乾燥したところを見計らって、5〜6枚を一束にし、ハシゴ(ショイコ)で運搬した。自宅の外に屋根をかけて、あるいは小屋に入れて、積み重ねて保管した。積み重ねることにより、厚さ15cmのサルケが、10cmほどに堅く締まり、火持ちがよくなる。締まらないものは火力がよいが燃え尽きるのが早いのだという。積み重ねることで、サルケの品質が変わるという証言は今まで聞いたことがなく、貴重である。——「そえて、これは、これなんも採ったのこんださ、こして、こうしてこして(サルケの1つ1つを順番に)、こして、こして、こして、積んで、乾がして、乾いだらこだウツさ持って来て。(間は)あげね。空げねで。うん。5〜6段積む。」「したんでこれこしたどごさ積んでおいで、乾げば、ハシゴで覚えでらベショイコで。あれさ積んでしさ。あれさとにかくこれ、これば、これは、アレだでばの。こう、こうしてこれだでば。これ縄でからがいで。五つでも六つでも。からがいで。こさこして、ただ積んでおいだもの、乾いで、たげこんど軽くなればこさこして、こういう具合にして縄もつてからがいで、ハシゴさつけで、で運んできて、何月だしたんであの、農家の、あれだでばの、シゴドあまりないどぎたんでナツ、とにかく乾いだあど、うん。冬より前。こればこんださ、ま、簡単にいえばこればこんださ、これば、何段もずーっと積むずや。うちさ持ってソドさでも、ウヂの小屋でもある人は小屋さ入れて、そしてなしに積むがてへばこれ草のねで、ぶわぶわづもんだだであ。ひて積んで、上から重さこうかければ、締まるわけや。締まって、まんず、これは、仮に、20cm仮に、仮にだ、ま20センチもヨゴはそんだだばって、みな15センチあるものは、10cmぐれえになるず。そへば、締まるどごで、焚いでも火もちいいわけ。こればりだばさ、あぐ火持ちねわけ。火持ちねえ、あの、燃えてボンボど燃えてしまふどごで。しまるどごで、火持ちいいでばな。それで、この辺はそれよりも焚ぐものねんだはんでよ。木でも何でもこの通り、の。ソドさ積む場合も。ソドさ積む場合はちゃんと屋根かげで、水入らねえように、ま、たいでいソドさ積むでばの。小屋ある人だば小屋さへで、小屋ある人ムガシは何人もねえだ。」

用途 サルケの用途は採暖であるという。炊飯はワラやマメガラ、カボシ(筆者注:ヤナギなどの先駆樹木の枝のこと)、シカバ(筆者注:スカンポ。イタドリのこと)などを併用した。サルケでは火力が足りず熾になるだけだからだという。ただしカギノハナから吊したナベでオツユなど長時間かけて煮るものには、サルケの火を用いた。また、握り飯や焼き魚などにも都合がよかった。冬だけではなく、夏場も調理にサルケを用いた。——「(焚く場所は)シボドで。うんあつたまるため。ご飯などはさ、ほとんどあれだの。ワラどがさ、大豆うえでるがら大豆の殻だどが、がらこんどあの、ムガシは、川端さ行けば、カボシって今のあの、アレだでばの。なんてばいいんだば、ヤナギの枝だどが、シカバておべでらな。シカバ。シカンパ(筆者注:スカンポ。イタドリのこと)ってううん。おっきくなる。あれムガシ川端さ行けばいっぱいあつただばって、それをさ、焚ぐとがつて、これがさ、ボーボど火にならねえはんで。サルケは。積んでおいでさ、燃えて燃えてとんこええづ簡単にへばの、炭だけになるだね炭のはえのなでばの。して重ねておげばし、火持ちいいどごでさ。(火持ちはよいが)ボーボーボーどはいがねえ。うう。それで、のう、ご飯炊ぐ。でナンモねえ人はワラ焚ぐどがさ。うう。それでご飯だの炊けば、火にならねえもの。オギになるだけだもの。(魚や握り飯を焼くことは)それだばでざる。こう燃えてしまえばさ、煙でで煙でで燃えてしまえば、ものすごいそれこそ、長持ちすもだね。うん。(握り飯や焼き魚など)ううんそれだばみな。いろいろだ。へてあれだでばの。オツユだの長ぐしさ、か(か)って煮るもんだば、それこそカギノハナ、カギノハナっておべでらべ。カギノハナつけで、そうやってでも、ご飯だの強い火でご飯炊いで、煮立つどぎ煮立って、アレでも燃えてしまえばこだ段々火なくなつてがらだばご飯なるたて、そういう、どどでぎねえでばの。たんでオツユだのやるだあ、そのサルケのネツで、ゆっくりやるんだでさ、それがらムガシの煮物とがなんとが、ほとんどそして。長ぐかかって煮るものはサルケのせで。(冬だけではなく夏も調理に)使った。その家によっては使うでばの。」

操作 着火時には煙が出たが、その後は火持ちがよかった。用途によって火の種類を選択し調節した。炊飯の際には前述の

ようにサルケに他の燃料を加えて、火力を演出した。煮物や焼き物はサルケの火でじっくりとあぶった。サルケのみを用いたり、外の燃料を加えたりすることによって、火を操作した。また、長時間の火の維持を念頭に、保管時にサルケを積み重ねて重力で強く締める工夫をおこなった。——「こう燃えてしまえばさ、煙で煙で燃えてしまえば、ものすごいそれこそ、長持ちすもだね。」「ご飯だの強い火でご飯炊いで、煮立ぶどぎ煮立って、アレでも燃えてしまえばこだ段々火なぐなってるがらだばご飯なるたて、そういう、ごどでぎねえでばの。たんでオツユだのやるだあ、そのサルケのネヅで、ゆっくりやるんだでてさ、それがらムガシの煮物とがなんとが、ほんととそして。長くかかって煮るものはサルケのせで。(冬だけではなく夏も調理に)使った。その家によっては使うでばの。」

副産物 目の前の人が見えないほどに非常に多くの煙が出た。N氏は、トラホームに象徴される目の病が昔多かったことは、煙が原因だと考えている。ニオイもあった。夏になると煤が黒い滴になって落ちた。灰も出たが、用途はなかった。——「ものすごく煙るもんだや。煙しでもんだ。ややややや今のんだば全、ムガシの目あがないでだんでムガシはトラホームだどが目の病気よげえあったんでねえが今だばねえけどよ。んやんや見え人見えねえほど煙。うう目いでえどぎあ、あな。ノイ(ニオイ)もす。ニオイもす。シシしたんでさ、夏さなれば、のぐぐなればそのシシずもの出てくるんだいな。出でくんだ。落ちるどごてば決まってるはんでしさ。(灰も)のごるのごる。それは、ねえな。たってまだベヅにハダゲさなげるとがだあそうな、なんさ使うっていうその用途は、ない。その人によって好きずきで、何さつかるがわがねえな。オアだじな。」

その他 N氏のほかに大正生まれの人はこの集落には外にはほとんどいないという。余談になるが、農具の金具を製造した鍛冶屋はたいそう繁盛したものだという。「カジババネゴト」ということわざがあった。鍛冶屋のババ(おかみさん)は秋になると一気にカネが入って来るので寝て暮らせるという揶揄である。——「この辺にあ(年をとった人も少なくなり)、わあクジュウサンだもの。(大正生まれの人は)もう何人もねえ。この村でも3人だ。ムガシしたんで、カンジャの、カンジャ、あまりいして、カジヤババ、アギさなればネゴドして。喩えあるだ。カネ入ってきて。あまりさ、カジヤってムガシそう繁盛したもんだね。なに、鉋やってもなにやってもみな、カジヤだべ。カジババネゴドってひた。うん。カジヤあぎになればたでじえ、お金よげ入ってくるはんで、カジババネゴドて。(ババというのは)ババや。カジヤのババ。秋さなればカネ入って来るどごで。カジババネゴドって。カジババネゴドってしたんだ。(このサルケを切る道具を頼んだ鍛冶屋は)今ねえ。この辺の鍛冶屋だ。こごのウヂあのおねあいでき、鍛冶屋で、ワダシよりもふたつつ上で、上のふとで。たげ前になくなった。××(個人名)。して、林がらこっちさ移って来た。(2018年7月1日取材)

⑮ O氏 昭和24年生(69歳) 女性

居住の経緯 昭和24年に蟹田で生まれ、48年に当地に嫁いだ。

呼称 サルケと称する。

使用年代 蟹田で生まれたO氏は、出生地では木を焚き物としていた。昭和48年に当地に嫁いだときには、サルケは使用されていなかったが、自分と同じ年代の人が子どもの頃には焚いていただろうと考えている。——「ワーだちだば、蟹田のほうだどごで、サルケだの、そういうの小さいどぎがら焚いだごとあねえ。こつのほうだば、むがしだば、オラダヂだいに(私たちのような年代の人が)子どもの頃だの、(このあたりの人であれば)中学生…もなってもだべお。「うん。(焚いた経験は、私は)ないです。トシだばいちゅばて(笑)。(私が蟹田から嫁いだのは)二十…四才が。いま、うん、いまになれば……よ…(昭和)四十七八年、ま五十年にはなつてねばてや(その頃は焚いていませんでした)。うん。(私は昭和)24年生まれ。こごら辺だばアレだべお。オラだちの年頃だば、あのこごで生まれだ人だば、あの、サルケだの焚いだ、焚いだりしたのアレだべおん。焚いであだつたずの。ムガシだばほんだつきや。焚いだり。オラつきや、オラ、あち(蟹田)だどごで、あのこのサルケだば、ね。まずこつた木、山のこつた木とが、そういうの伐って、子どもの頃な。うん。親ど。そうして焚いだどどだばあるばって、そのサルケだば、焚いであだつたどどねだ。うん。こご生まれだ人でねば子どもの頃からでもアレ(サルケを焚くような経験)したどどねきゃな。まんずや。こごだりもお年寄りまづねだねえ。子どもねかわりに(笑)。お年寄りもな。だんでこご生まれだ人だば、あの、アレだでばの。シモのほ(穂積地区の北の方)さ行けばそでも、オエのエがらそちさ行けばだば、うんと、そちがわさ。下がれば、だばそれでも覚えじゃ人も年いった人もいるがもわがねばって。」

定義・分布・質 嫁いだときには、サルケというものが何だろうと思った。聞いたところ、田やヤチの中から取り出した「根」を干したものだということがわかった。——「あの何だかサルケ、サルケって何だきがつたばってな。したつきや田のなががら、あの、田だがらヤチだがわがねばって、その、根。根、干して、焚いだもんだってな。」

採取の目的 目的については語られなかった。乾燥させて焚いたという話だが、焚くことが目的かどうかは不明。

採取の時期・場所・主体 「サルケ田」の中から採取すると聞いている。——「サルケ田の、田のなががらとる。」

採取法、乾燥・運搬・保管、用途、火の操作、副産物 これらについては、語られなかった。

その他 昭和48年当時には使用していなかったという事例。(2018年7月1日取材)

⑩ P氏 昭和17年生(76歳) 女性

居住の経緯 中泊の豊島(としま)から昭和38年に当地へ嫁いだ。

呼称 サルケと呼んだ。

使用年代や地域 子供の頃、つまり昭和20年代にはサルケを焚いているのを見ていた。神原の橋(神田橋)の向こうにある、豊島の集落ではサルケを使用していたという。——「サルケえ？うん。それだばオラだち年代だばわがらねえな。もっと上の年代でねばわがらねえ。」「子どもの頃は使ってはいました。中泊のトシマっていうあのカンバラのあの橋(神田橋)渡ってしごう左に曲がって行けば、すぐの村なんだけどの。うん。使ってはいました。サルケ使ってた。」「うん。そう(他所から嫁いで来た者)です。この方ではない。(生まれ育った中泊町豊島では)子どもの頃こういう小せえどぎの。つか、うんとやってあったけども、いつ頃掘っていつ頃どうやったか、しょの、あれはわがらない。もっと年代が上でねえばわがらねえども。私中泊のほうです。うん。うんうん。(生まれは昭和)17年。(嫁いだのは)21(歳のとき)。」

採取の目的 豊島は「木がとれない」が、中泊の山のほうでは木を燃料に使っただろうと語る。豊島でサルケを採取したのは(燃料にするための)「木がとれないから」であり、つまりサルケは木にかわる燃料として採取したということの意味している。——「木はとれない。私の村は。山じゃないから。ずっと中泊の山のほさ行けばだば山あるはんで木も使ったかもしれないけどね。」「

採取法 P氏は現在76才だが、子どもの頃のこと、焚いているのは見たがどのように採取したのかについては分からないという。——「いつ頃掘っていつ頃どうやったか、しょの、あれはわがらない。もっと年代が上でねえばわがらねえども。」「うん、燃やしてるのだば見たけども、子どもの頃ね。で、どういうふうに切ってきたかって、わ、それはわがらない。」「

用途 何のために燃やしたかについては語られることがなかった。(2018年7月15日取材)

⑪ Q氏 昭和30年生(63歳) 男性

居住の経緯 昭和30年に当地で生まれ、当地で育った。

呼称 サルケと称した。

使用年代や地域 子どものころ、すなわち昭和30年代に焚かれていた記憶があるが詳しくは覚えていない。当時はすでにマキや石炭が売られており、貧しい次男三男の分家がサルケをよく使用していたとQ氏は語る。——「ワしたてちせ頃だはんでたいした記憶はあの、アレはない。ワアちいせえ時もサルケ焚いであったもの。で、記憶にはある。」「たんでまあ、はえどご貧乏な、にだいえがサルケサルケっていったったその当時はもう、まあ、マギとが石炭とが売ってるべはんで。」「

採取の時期・場所・主体 採取した時期は覚えていない。当地よりも北方にある田の下から採取した。Q氏が子どものころ、手伝ったという記憶はなく、ただ見ていた。——「(掘る時期は)ああそごまではキオグねえ。」「(記憶)もある…手伝いだばやねな。ただ見で、もうある程度、ま、ど、こえ田んぼの下、ネッコ、ネッコだでばな。をこう、シカグに切って、それを、まあ乾がして、それを燃やした感じあどはわがねな。ワあおぼえじゅうのはシモ(北のほう)だな。」「

採取・乾燥 田の下から四角に切り出し、乾燥させている様子を見た。——「田んぼの下、ネッコ、ネッコだでばな。をこう、シカグに切って、それを、まあ乾がして。」「

用途 乾燥させたものを燃やしたことを覚えている。用途については語られなかった。——「乾がして、それを燃やした感じあどはわがねな。」「(2018年7月1日取材)

⑫ R氏 昭和10年生(83歳) 女性

居住の経緯 昭和10年に生まれ、当地で育った。

呼称 シャラケと称した。——「うう、う、なだもだ。サルケてへば。知らない。ああああ、えええ、シャラケ。んだ。おべでらおべでら。」「

使用年代と地域 R氏が子どものころから20歳のころ、すなわち昭和10年代～30年代ころには使用されていた。地域ではどの家でもみな焚いていた。——「オラきや子どものドギだもの。うんや、まだハタチのあだりだでや。」「(燃やすことは)んだんだみなやた。どごのウヂもみなやた。(炊飯に使ったのか)なもなも孫バサマあたどごで、ご飯もなもたがね。うん。(用途は)サラケ焚いで、みなあだったんだね。んだんだ。」「

採取の時期・場所・主体 採取の時期についてはわからない。沼館(つがる市稲垣町沼館)の「ヤヂ」と称する場所から採掘した。現在は田になっている。手伝ったことはなかった。——「あの、ずっとヤヂ、ヌマダデの、ヤヂてすどごがら採ったんだ。いま田んぼにひてまであだ。(田植えの前か)いづがわがねぐなったな。(手伝いは)なもなもなも。ガッコさ入ってるどごで。うん。わがねな。なもそういうごどバアチャンなもわがね。な。ん。」「

採取法 採取の方法や道具については、手伝っていないのでまったくわからない。——「(どんな道具を使用したかなどは)なも、な一んにもわがらねえ。」「

乾燥・運搬・保管 採取後、家まで運搬し保管した。時期は覚えていない。——「(運んできて家に)おいでおぐだ。(運搬の時期は)なも今さなれあなもわがね。うん。今のわけものだきやまとわがねべおん。」「

用途 燃料として使用し、暖をとった。炊飯は祖母がおこない、自身は経験がないため不明。——「(燃やすことは)んだんだみなやた。どごのウヂもみなやた。(炊飯に使ったのか)なもなも孫バサマ(祖母)あたどごで、ご飯もなもたがね。うん。(用途は)サルケ焚いで、みなあだったんだね。んだんだ。」

副産物 煙が出たが、詳しいことについては答えたくない。——「んだ煙はではるんな。オラもわがねね。(元気ですね)元気でねあワゲモノにご飯焚いでたべさせねばねもの。ご飯炊いで帰ってきたらワガイ人ご飯食べるの。」(2018年7月15日取材)

⑨ S氏 昭和15年生(78歳) 女性

居住の経緯 昭和15年に市浦で生まれ、昭和32～33年頃に当地へ嫁いだ。——「(私は昭和)15年生まれ。北郡。市浦。市浦だばマギばりだべさ。だから、見たごどもねでばの。若がったよ。10ついでらに來たよごさ。17～8のあだりだら。ストーブ焚いでだ。」

呼称 サルケと称した。

使用年代 昭和32～33年ころ、地域の人たちがサルケ使用していた。嫁ぎ先の家ではストーブを焚いていた。——「サルケ。なあんか、昔の人だちな、オラだちごさ嫁にきたどぎ、田んぼのツヂ掘り返して、田んぼのナガがら採って來てシカグにこう、やって、乾燥さへで。あの、焚き火と一緒に、焚いだもだあでばの。え。そうやって、焚いでたなあって思っで。」

定義・分布・質 馬の糞のような四角いものである。——「四角だたて、あちさいぎゃあマノクソみたいなもの干してらってして騒いだもんだもの(笑)。」

入手法 地域の人々が田から自給的に採取していた(他の項目参照)。

採取の目的 田の下から採取したあとで土を戻し、燃料として用いていたという証言から、田地の改良と燃料の確保が目的であったのではないかと推測される。ただし、S氏からは目的に関して直接的な言及がなかった。

採取の時期・場所・主体 集落の人々が地域内の田(ゴミ焼却場に至る幹線道路の北側)からサルケを採取した。自身は採取に関わったことはないで、採取していた人が男性かどうかは知らない。——「田んぼのツヂ掘り返して、田んぼのナガがら採って來てシカグにこう、やって」「(採りに行ったことは)ない。ない。」「(しかし当時、この集落にサルケは)あったの。や採ったとごも、田んぼで、あったどごももあったもるずったんぼさ行ってみればの。」「(サルケ採る人は男かどうかは)すらねえそれだばごごのふとでねえごで。」

採取法 田の土を掘り返して、他の中から四角に採取した。サルケを掘った場所には土を戻すが、戻さないでいる場所は深く、ぬかるみになっており、「サルケ穴」「サルカイ穴」と称した。ゴミ焼き場からまっすぐ走る幹線道路の北側から掘ったと記憶する。乾燥したもののサイズが20cm×30cm×10cm弱だったことから、採取するときのサイズは、それよりも大きなものであったとS氏は考えている(「乾燥・運搬・保管」の項参照)。——「田んぼのツヂ掘り返して、田んぼのナガがら採って來てシカグにこう、やって」「『サルケ穴』ってむがしあたもんだねな。田んぼにな。うん。サルケ掘ったどご穴なちゅうどごでサルケ穴てしたもんだでばの。いま、今カンドー(幹道)なってる、道路のこちがわのほうだば、掘った、とたどごあ、あただいなムガシな。今、圃場整備なあって、あそこのごどのおつきい道路あるべ、ゴミ焼きのほじがらまっすぐに。あのカンドウの、下のほうなちゅでばの。あの辺だば、採っ、掘ったどごもあたらった感じす。うう、『サルカイ穴』ってあったもんだね(笑)。うう。田んぼがら採って、ぬがるどごで『サルケ穴』てしたもんだったあ。田んぼがら採ったずう。そのツヂ掘り返してとたもだどごで、それまだそごさアレ入れるばってツヂはいねどごで穴なちゅべ『サルケ穴』てしたもだでばなあだべあな。んん、深ふてたべおん。ワダ、あのオラダヂだばったあどごさ入たごどねばて。」

乾燥・運搬・保管 S氏が見たのは、積んであるものだけである。堰の間の広い場所に、作業に支障をきたさない場所に、積んでおいて、家に運搬した。その方法はわからない。乾燥したもののサイズは、タテヨコ20cm×30cm、厚さは10cm弱の大きさだった。だから、採取したサイズは、それよりも大きなものであったと考えている。一冬に必要な量はわからないが、嫁ぎ先の家に多量のサルケが積んであったことを覚えている。その後、サルケを管理していた舅や姑自身が不要だと判断して捨てたため、現在は残っていない。——「なが、四角だたて、あちさいぎゃあマノクソみたいなもの干してらってして騒いだもんだもの(笑)。「でぎで、もう積んでおいだあうずすか見だごどねえずいの。もどさ、あの、用水路ナンボもこうあったでばな、ずっと、あのまっすぐにあの田さ、田んぼさもって行く、何畝何畝ってやあたもんだんだ。そのセギの、間、こう広いんたとごさ、積んでおいでさじゃまにならねんたとごさ、積んでおいでで、そえてウツさ入れで、そえて焚いだもんだあべえ。(家に運搬する方法は)しらねえ(笑)。(運搬したあとは)小屋どさ置いどいでさ。ちょっとこの、このくれえ(20×30cm)だあ、大ききだよ。このくれえだ大ききだ。このくれえだ大ききでさ、積んでったもんだんだ。20cmがこう、30cmぐれえにな。あまりおつきいばもでべし。厚さはこのくれえ(10cm未満程度)あったなそれでも。乾燥してで、このくらいだはでかなりあれだべえの。(乾燥したのが)このくらいだんだはんで。(一冬に必要な量は)知りませんよう。ウヂにはの(たくさん積んであった)。(現在は残って)ない。ムガシのじっちゃんばっちゃんアレしたもんだどごで。つがわねばツヂなってるしの。」

用途 S氏が嫁いだ昭和30年代前半にはすでにシボドはなく、マキストーブ(ダルマストーブ)でサルケを燃やした。S氏の嫁ぎ先では、りんごを栽培していたので、その枝と一緒に燃やした。炊事の際にもストーブを使用した、燃料にはサルケを使わ

ず、川ばたから刈ってきたカボシを使用した。土間のカマドの前では、サンボンアシにナベをかけて炊事をおこなった。いい家（オオヤケなど）では、カマドそのもので炊事をしている人もあったが、自身の家ではサンボンアシにトタンなどで脇をかこい、火が漏れないように工夫を加えて炊事した。——「シボドで焚いだりしたごとだばねばって、ストーブ、あ、ここウチで、りんご作ってだわげ。でりごの枝どいしょにストーブのナガで燃やしたりしたのは覚えでる。うう。ダルマストーブ。ご飯炊いだふとだば、聞だごどねばって、まあ、ムガシあれだはんでの。あの、カマドみたいだあの、で、柴焚いでだりワラ焚いだりしてご飯炊いだりしたもんだでばの。（炊飯のときはサルケを）入れない。ストーブだけ。暖房だでばの。まあ、木炭がわりだもだでばの。マジどいしょにあれど燃やして。（煮炊きなども）にややってるふともあるがもしやねばって、ガス使ってながったごで、竈で、あの、サラ、あのカボシとが、あの、フグロ、あの川ブグロがら刈ってきた、あの、それごそにづあくサのアレだであ乾燥したもだでばの。カボシてえ。それで焚いだりしたでばの。カマドで。カマドだどサボアシ（三本足）あっててしたもだども。サンボンアシさナベかげでそれでやったりしたもだども。サンボンアシのやづ、うちもあたし、カマドで炊いじゅうふともあって、いいしだば、カマドで炊いだりしちゅうでばの。（私の家は）サーボアシ。わサボアシさ。ちょっとこう、工夫してやの。へえ（火）脇さいがないように。トタンとが何とがこうやってしさ。そうやってやってた。ええべづのこつ（土間）で。土間で。」

副産物 S氏がサルケを利用した当時はすでにマキストーブの時代だったので、煙は煙突から排出された。——「（サルケの煙は）煙突。」（2018年7月1日取材）

㊫ T氏 昭和16年生(77歳) 男性

㊬ U氏 昭和22年生(71歳) 女性

居住の経緯 T氏は昭和16年に鶴見里で生まれた。その夫人U氏は木造出身で昭和22年に生まれ、昭和41年に19歳で鶴見里に嫁いだ。昭和46年、夫妻は現地に家を建てて移り住んだ。——U氏「（私は）木造（から嫁いできました）。ううん。（サルケは）あった。あこだばな。」T氏「今だあこの辺だば山とへば、あおの、館岡の山、オラ館岡の山今ひぐいばってな。あちの山ど違って低いばってそれでも、アレの下だあサルケだばある。あの辺だば。うんここでね。こごでねばてま、こごみてえ、ちよつと向こうだね。」U氏「（小さい頃の話は鶴見里での話）そうそうそうそう。」T氏「（私は昭和）16年（生まれ）。（妻は昭和）22年（生まれ）。77（歳）。」

呼称 サルケと称した。

使用年代や地域 実際に自分でサルケを採取したことも、手伝ったこともない。また、シボドでサルケを焚いていた記憶があるが、幼少のことではっきりとは覚えていない。しかし、かすかに記憶があるということは、10歳前後のころ（昭和26年ころ）だったと思う。その後マキストーブになり、ストーブでサルケを焚いたのは昭和30年よりも前までだと思う。サルケの採取などについては、親や知人から伝え聞いた内容である。サルケそのものと、サルケを採取する道具であれば実際に見たことはあるという。

当地に移住した昭和46年当時、穂積ではサルケを使っている人はなかった。マキを使用している人すら少なく、石油ストーブの時代だった。——T氏「（自分がやったことは）ねえねえねえねえ。うん。まあ、その、ワダヂの親だばやたべばて、オアだばその実際やってらどご見だごどねばてな。ない。話でな。それで、これ、今しやべたことおべでるごとは、親がら聞いだり、あちこちあの、トモダヂの話だのそえんたもの聞いで、実際のその、道具も見でるしな。」「（手伝ったりしたことは）ないない。（実際に掘っている様子を見だごもねし。」「（ストーブでサルケを使用していたのは昭和）30年、もっと前がらだべ。」U氏「前がらだいな。オーラだちわらはどだどぎだば、サルケやんねんた気すな。」T氏「えそれ、その、とごろとごろでまだ、まだ違う。サルケいっぱい採れるどごは長く使ったべし。」「オラこちや来たず、50何年、46年だが、昭和の46年だが。（当時）はもうサルケもなもねえ。オラ来たどぎそう、マジもそうねえね。セギユストーブであつたごで。」U氏「（私が鶴見里に嫁いだのは）19歳。年いった人ど会ったら、オラダヂよりちよつと上の人ど行きあつたら、ちよつととめで聞げばその人もつとおべでるよ。」「あまりなも焚いではない。あつたがもわがねばって、その当時オラだばわがねもの。ちいさくて。」T氏「わがらない。たげ遅ぐまで使つてあでねぎゃあ。孫ババだのストーブ、でねあシボドさ、…うっておせぐはねや。オラナンボがそれ見でおべでるずごどは、な、とおぐらい10歳ぐらいなればそれ、ナンボがでも覚えでもちよつとずづでもキオグのごつてらはんでこういまこれわがってる。」U氏「サルケだきやそうねえべさ。ストーブ焚いでたげなつて、オラダヂ……」T氏「あつたべおん。なも、ちゃとした、ちゃとしたキオグねえどごで。」「（そういうおっきいシボドも（我が家には）ない、んああるにはあつたばて、オラおべでがら（物心がついた10歳ころ以降）だば、（マキ）ストーブだいな。」「

定義・分布・質 サルケとは「（昔）燃やしたもの」である。穂積周辺は田としては一等地であり、サルケがあまり分布していない。繁田、繁蕨方面に分布しているという。「クサ」が広がっており、表土（いい土）を掘ると下はサルケになっているという。現在は田になっているが、当時は「サルケヤヂ」といって、各家で区画を購入して自ら採取した。穂積でもサルケヤヂを持っている人は採取して運搬してきたという。——T氏「なに。サルケ。ああああ。燃やしたやづな。アレは、これがら向ごうのほじ。うん。シゲヤヂのほうだな。シゲダ、シゲヤヂのほう。今はあの、クカグセイリして、地盤いぐなつてまつたごで、ムガシはあのへん、ずーっとクサ。クサだけおがって。その下ちよつと掘れば、上のいい、表土だでばの。表土掘ったあど、ずーっとあのサルケ、それを全部切ったもの四角にな。（切るのは）うんそうそうそう。（今の）田んぼ（になっている場所、もともとはヤチ）の下がら。ううん。そ

の当時は田んぼつくってねえどごで。で、そごサルケヤチって。ちゃんとそう、区域みたいのがあったんでばの。みなその、各戸々でそういう、サルケヤチ、あの買って手、さ入れで、自分で掘ったもんだがら、それあ詳しくわがねばって。サルケヤチってあったもんだだ。」「この辺は採れない。今現在でもそうない。ちょっとむごさ行けば、今でも、あの、機械田入れるべ、ぬがるって、ぬがるって下がってまるでばな。行けねわけさ。で、掘ってみれば、やはりサルケ残ってる。」U氏「(穂積ではそれほど)やってねでねがな。」T氏「結局、サルケヤチある人は持って来たでばの。(ここでは)とれないとれない。うん田んぼどしてはないほうがいい。この辺一等地だもの。この辺なもサルケねえ。うん、いい田。土地がいいでばの。」

入手法 「サルケヤチ」と呼ばれる湿地に各家ごとの区画があり、各自が自家用に採取した。——T氏「ちゃんとそう、区域みたいのがあったんでばの。みなその、各戸々でそういう、サルケヤチ、あの買って手、さ入れで、自分で掘ったもんだがら、それあ詳しくわがねばって。サルケヤチってあったもんだだ。」

採取の目的 サルケとは「(昔)燃やしたもの」「暖を採るためのこと」だとT氏は語る(「定義・分布・質」の項、および「用途」の項参照)。また、湿地から採取してきたものだという(「入手法」の項参照)。T氏にとってのサルケの採取の目的は、燃料にすることだったのではないかと考えられる。——T氏「暖採るためのごだどごで、サンビぐなればイヅだって焚がなあでばな。」

採取の時期・場所・主体 サルケは繁菰や繁田方面にある「サルケヤチ」から採取した。——T氏「アレ(サルケ)は、これがら向ごうのほじ。うん。シゲヤチのほうだな。シゲダ、シゲヤチのほう。」

採取法 「サルケヤチ」と呼ばれる湿地の「クサ」の下を少し掘ると表土(「よい土」)が現れる。その下がかなり下までサルケになっていたという。「長い木の棒に広い刃のついたもの」を垂直に立てて切れ目を入れて採った。切り取った穴には土を入れた。——T氏「うん。道具が。オアへばしかへるあ。まあ、こ、これだけこうなげえのだから、このぐれえの、長い棒さ、木の棒な。木材の木で、下さ、こういうようなもの、もっと広いやつ。うん。まっすぐ、で、これこう立で、こ、ずっと切て、いぐわけだ。そて切ったわけだ。」「うん。切れ目つくて、そごにあればまだそも採るがもわがねし、まずそご採ったあどはまだ、どうなってるだがら、すあ、ずっとひっこんでまってるども、してまだ、その周辺のツチまだ入れどいだがら。」「ずーっとクサ。クサだけおがって。その下ちょっと掘れば、上のいい、表土だでばの。表土掘ったあど、ずーっとあのサルケ、それを全部切ったもの四角にな。(切るのは)うんそうそうそう。(今の)田んぼ(になっている場所、もともとはヤチ)の下がら。」

乾燥・運搬・保管 自宅の近くの道路の端に風当たりのよい場所を選んで互い違いに積んで乾かした。乾燥させたものは20cm×20cm×厚さ10cmほどの大きさだった。あまり厚いと乾燥しにくいので、これくらいのサイズなのだという。——T氏「(サルケを見たことは)あるある。うん乾がしてな。(自宅で焚いたことは)あるある。まず、このぐらいでばな。30cm、もねえな。20cmぐれえの大きさで。じつとああ切って、それでうちや持って来て、風あだりのいいどごさじーっと積んどぐの。で乾がしてそれ冬に使うの。そのぐらい(20cm×20cm)だな。厚さそんなあづうもんでねんだ。うん。まあ、こえんたもんだ。あんまり厚ば乾ぎわりはんで。うん、(家に)持って来て(乾かした)。持って来て。ま、(置き場所は)風あだりいいどごでばな。家のあの道路の端さずーっとこう、こう、やれば上さこんどこう、互い違いに。」

用途 サルケを使用するのは秋から冬、春にかけての寒い時期に暖を採るためだったとT氏は語る。サルケはシボドで焚いた。昭和26年ころ以降は、シボドにマキストーブを置くようになったが、マキストーブでサルケを燃やした。炊事(炊飯)については、シボドの時代はわからないが、マキストーブになってからは、マキストーブにナベをかけておこなった。その後、マキストーブに「チバガマ」(ツバガマ)を嵌めておこなうようになった。ストーブを使用するようになってからは煙突を設けた。——T氏「(焚いた場所は)シボド。(着火はサルケだけではなく)いや、先に火種つくって、それさこう、重ねで。(シボドの時代に炊事もサルケでおこなったか)それまではわがねな。オラあの、ちょっとおべでがらだば、カギノハナでもねしてあたしな。その家庭家庭でみな違うの。ムガシからの、あい、今こうしゃべればオオヤゲだお。ムガシからのカマド大きい家だでばの、そういうどごは、ちゃんとおっきいシボドあって、カギノハナあってで、そごで、したんでやって、ワだちは、そう古しいカマあの、家庭でねえどごで、そういうおっきいシボドもない、んああるにはあったばて、オラおべでがらだば、ストーブだいな。ううん。やったり。(炊飯は)ナベだべ。最初のウヂは(ナベ)、あどがらなったらチバガマってら、チバちだあれやたばてな。最初だああの、普通のナベだべねな。普通のナベで今のアルミだのあたもんでねばてな。土鍋、ドのナベだでばな。(シボドのストーブで炊事を)ううん。やったやった。(サルケを使用するのは)冬だけだでばの。ま、冬て、さびぐなれば冬ってそういうにせば秋でもサビどぎだばサルケ焚いだりしたしな。暖採るためのごだどごで、サンビぐなればイヅだって焚がなあでばな。今ストブ焚ぐど同じせあ。いやいや煙突なもね。ストーブなつたどぎはあたばて。ただシボドさこう、マギの下さこうやってやるどぎは、ただおおっぴらだステュブだ。」

操作 火種を作り、サルケを重ねて着火した。——T氏「いや、先に火種つくって、それさこう、(サルケを)重ねで。」

副産物 シボドの時代は煙突がないので、昔の家屋を解体するとまっ黒になっている。煙やニオイが、木を長持ちさせるのだとT氏は語る。マキストーブになってからは、煙突で煙を排出するようになった。——T氏「まあ、煙あたべにほだてムガシの家屋解体へば、上のほうまっ黒になってまて、それが、その木に対してたいへんえぐだって長持ちすだてな、その煙のそれニオイが。」「いやいや(当たり前のことだがシボドには)煙突なもね。(マキ)ストーブなつたどぎはあたばて。」

その他 お話を伺った日は、たまねぎの植え付けの準備をしていた。(2018年7月1日取材)